素原の超個人主義

黍稷農季人
2020
Fundamental Transpersonal Individualism
Kibikibi Noukijin 2020

はじめに

私はトランスパーソナル個人主義という想念に至り（黍稷農季人 2016)、これを個人主義の拡張・展開、超越による思いやり、分かち合いと考えた。このために、多くを学ぶことが教養の質で、学び考えることから逃げずに、家族や友人を大切にし、人脈を広く求めることが必要であるとした。意図せずして超克という題名で随筆を書いていたが、倉田百三（1924、33 歳）に『超克』という題名の著作があった。この大正期の倉田はいまだ若く求道精神にあふれ、おおよそ 100 年前に書かれたにもかかわらず、私と同じような課題に対して同じような方向性を示しているように見える。しかしながら、同書との混同誤解を防ぐためにも、超克の語義を広く解釈して、自らをさらに磨く意味で本論考を『素原の超個人主義』と題することにしよう。克己復礼為仁（論語）{私欲にうち勝ち、礼儀をふみ行うようにすること（広辞苑)}という用語法もあるから、トランスパーソナルを拡大した自己を求めることとするのなら、新造語として超己と改めてみてはいかがだろうか。しかし、己と個人という同義語を重ねるので、超個人主義として、素（もととなるもの）と原（おこり）で形容することにした。

フォックス,W.（1990）は、トランスパーソナルとは、個体性を超え、個人としての発達を超えて、個人よりもっと包括的な何かを目指す beyond ego、自我的、自伝的、ないし個的な自己を超えた自己感覚、できる限り拡張された自己感覚を現世で獲得すること、としている。それならば、超個人主義と記しても意義は通ずるだろう。倉田（1924）は『環境学習原論』(木俣 2019）にも引用したが、もう一度詳細に読み直して、次に要約引用する。なお、本論考では恣意的解釈を防ぐために原文（訳文）の引用を多くし、用語集も本文末に示した。

私は全生活の基礎を定める一つの根本仮定、「善と福の一致という観念」を置く。そうあるべきはずのもの、そうありたきものとしては、私の倫理的思想の内に深く横たわっていた。また正統派の宗教家及び常識的な市井の善人にはこれを信じている者が少なくない。しかし私はこれまで未だかつて一度もそれを事実であるとして信じ、したがってその上に精神生活を据えようとしたことはなかった。この地上の生活の相を見るときに必ずしも善人が悪人よりも幸福でなく、吟味するとき我々は地上の生活において、善と福との厳密なる一致の事実を認めることは不可能である。

しからば、われわれの精神生活をこの事実に順応せしめる道は如何であるか。それは三つあるのみである。第一は善と福とは一致しないことを信じて、それにもかかわらず、善を追求する道である。第二は善が福に一致するかぎりにおいてのみ、善を追求する道である。第三はこの事実あるにもかかわらず、なお善と福との一致を可能ならしむごとく世界観を拡張することである。私は人間の本性に最も適合する、最も合理的なるものとして、第三の道を選ばざるを得ないのである。

精神生活とは現実を理想に一致せしめんとして、現実を超克していく生命の過程である。超克は否定ではなく、包摂し、止揚することである。人間、超人を超克して聖人になり、その後再び民衆に没落して、民衆の仲間になる。同情との闘い、羨望と、嫉妬と、肉欲と、愚痴と、すべて卑しく、狭く、誇りなきことを超克せんと努力しなければならない。我々の孤独は我々がこれを欲せずして、しかも避けることのできない悲哀である。

さらに、関東大震災を経験した後、おそるべき出来事がある人生をいかに調和あるものと感じて、生きる悦びを感じることができるか、これが最も大きな問題である。個人意識に終始する限り、恐るべき事件をもつ世界を肯定して生きることはできない。個人意識以上の人類意識、宇宙意識（信仰）をさながら個人意識として把握するべきである。近代人は個人意識を重んじ、人類的宇宙的本能を発達させてこなかった。近代人は自然科学の限界や本質を粗雑に理解しているにすぎず、教養が足りない。この信仰に立って、しかる後に環境を改造し、不合理な経済組織を改革する文化史的必然がある。しかし、環境や経済を改造すれば解決が得られるのではなく、生きがいの問題は残されたままである。

このように倉田の論旨は百年前にして、すでにトランスパーソナルで、超個人主義の嚆矢にも思える。私は常々、栽培植物ほかの起原を考えているので、素や原を主題として求め続けている。そこで、論題にあえて新造語として素原を形容語に用いた。

私はこの論考（第三）を次の三部作のまとめとする。第一論考は経験してきたムラ撥撫の事実を記録し、なぜこのような醜い人為的事象が起こるのかを検証した（木俣 2021a）。第二論考は山村農人との篤い親交の書簡からそのままの美しい暮らしの在り方を証した。真逆の課題である第一論考の人間の醜と第二論考の自然の美を同一文書内で論じたくはなかったので、第三論考では直接体験をあまり語らずに論理をまとめ、あえて先行して別の場所に掲載、公表することにした。何故ならば、第一論考と第二論考にあっては、自ら体験した事実であっても、あるいはなおさら、文章表現において情緒を完全には拭い去ることができないと、読者から公正性に疑念をもたれることを恐れたからである。

2020.9.20.

1.　超克へ祈りと願い　　2020.5.6～5.22

ステンドグラスを透過した聖堂の光彩は影と共にある。

心の光は輝き、美しく清んでる。
心の影は奥ゆかしく揺蕩うている。
地下に埋められてきた心の闇には悍ましさ、
もう朽ち果てて消えてしまえ。

全て生き物の文明が新しい地平線のそこまで来ているのだ。
陽光はすでに昇っている。
野の草木の花々も綺麗だ。
生きる幸せの他に余計なものは何もいらない。
安んじて、穏やかに歩んで行こう。
（心の聖堂、2020.5.6）

明日が突如として一本鎖 RNA/COVID19 に奪われる恐怖が、これほどまでに身近に迫ってくるとは、意識的にはあまりに唐突だ。恐れ多くも神仏ですら、人間として死を生きられたのだから、年老いればいずれ近い年月に自らの死もあることは、覚悟はできないまでも理解はしている。今なすべきことを、明日に延ばすことはできないようだ。しかし、すでに大方書き終えた長文の第一論考は感情を冷まして熟考するために一年間保留するつもりだ。

民族植物学ノオトを発刊した動機は、インドの友人ジャガディシュ博士の論文がシコクビエの葉枯病に関する農薬の効果についてであったので、農薬は環境教育に反する内容だから東京学芸大学環境教育実践施設の研究報告には掲載しないと却下されたからである。私は論文の内容は著者の責任において自由であり、評価は読者がするものだと考えており、過剰な内容審査や検閲行為は学問の自由に反すると考えるから、とても嫌だ。この理由によって、自ら雑誌を創刊することにした（2005）。この民族植物学ノオト創刊号の巻頭言に、「もう一つの阿修羅として」と題して次の文を記した。すでに 15 年を経ているが、まさに絵にでも描いたように、私はこの通りの人生を歩み、古希を過ぎても、昨年末からの心的外傷後ストレス障害を忍んでいる。何とか此岸には恨みを残さずに、気持ちよく彼岸への旅立ちを迎えたいと強固に願う。

門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて 2 体飾る（表紙）。門男の作り方は、まずヌルデを里山から伐ってきて、1 メートル余の大きさの丸太にする。この丸太の端を削った半円形の白肌に墨で目鼻を描き、頭に竹の髷をつけ、次に藤蔓で腰紐をしつらえアーボ（粟穂）、ヘーボ（稗穂）、鍬、鎌をこれに挿す。思うに、門男は山の神の使いで、農耕の智恵と畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。

このところ研究人生に秋霜烈日を思うようになったのか、身体的な衰えよりも未だ混沌として整理できない心の葛藤に感じやすい。自然崇拝、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとても興味をもつようになった。ひろさちや（2005）は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅のあり方を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかった。まだ学生の頃であ

ったか、読みふけったジョージ秋山（1970）の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都(1995)が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である。新美南吉(1932)の『ごん狐』も阿修羅なのだ。宮沢賢治（1923）は心象スケッチ『春と修羅』中の 1 編「春と修羅」で、「はぎしり燃えてゆききする　おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。

こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたい私も一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない戦こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、また私たちの歴史である。忘れてはならない多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展を目指し、民族植物学研究室の成果をささやかな雑誌にまとめ、毎年 1 回発行することにしたい。

心的外傷後ストレス障害 PTSD を引きずり、悔しく苦痛であるが、感情に流されて行為しないように、しばらく時間を置く。明日への不安がありながらも、感情を自律制御できるように、矢張り待つべきだろう。復讐心ではなく、犯罪者個人への反撃でもなく、ムラ社会とそれによって行われたムラ撥撫の罪を許さず、形成と発生のメカニズムを白日にさらして、その事象を告発する。属性は削除、個人情報保護、偏見・先入観を防ぐつもりだ。個人の属性を記せば、心理的構造はより明瞭になるが、個人情報ではある。たんに記号 ABC で論ずるべきなのだろうか。被害者にすれば、犯罪者に対して容赦はいらないはずだ。罪を憎んで人を憎まずは、被害者の苦しみを黙殺する偽善だ。つまらない日本のサスペンスの定石だ。しかし、私は、復讐の行為はしないが、この感情を全否定することはできない。

心優しい日本人は、あなたの幸せや健康などを祈りあるいは願います、と言ってくださる。私もほとんど意識せずに、この 2 語を使っていたようだ。しかし、数年前から、何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、日本人にとって、私にとっても、それが自明なことなのか、疑問に思うようになった。人生で、力及ばずに苦しいことが起これば、日本人は何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、そうなのだろうか。

真に僭越ながら、神ならぬ身が、我が身に及ぼされた罪を許すこととは論理的にもできない。悪意をもって危害を加えられたら、反撃するのは当然だ。神仏でない人間が、悪意をもって攻撃する相手を許すことなど、あまりに僭越だ。でも、やり返す過程で憎悪に溺れれば、似て非なるとはいえ罪を犯して、意識せずして当事者以外の人々をも巻き込むだろう。復讐をしないのは自律して我慢するからだ。

しかし、心情的に他者の罪を恨み問うても、自らを浅ましいと思ってしまう心情は、一体どこから来るのだろうか。被害者が自らを責める心的外傷はどのような心の作用なのだろうか。加害者に反撃しても、心的外傷は直らないという心情、復讐を押しとどめて自傷するのはなぜなのだろうか。神仏に心の傷の治癒を祈り、願いすれば、癒えるのだろうか。宗教に敬意をはらってはいるが、私の信仰は自然にあり、アニミストだから、その祈りや願いの先は自然のカミガミであり、言い換えれば自然治癒、自分で治れ、すなわち超克するということだろうか。我慢する、自律できる強い精神力を鍛えることだろうか。自問するばかりだ（2020.5.7～5.8）。最近の日本人の多くは神仏、カミガミを畏れていないようだ。増上慢は極まって、神童、神業、神泡、神対応、神回、・・・なんて不遜なのだろうか。

ムラ社会の事はすでにかなり論考してきた（木俣 2015）。しかし、さらに心が凍り憑く事象が自らに起こったのだ。このことについて自傷しながらも、超克するために、さらに具体的事実に基づき、テキスト分析を用いて客観的公正に論考した（第一論考 2021a）。一

方で、降矢静夫老師の自然賛美、山村自給知足の暮らしを対照して、心を洗うように比較研究することも同時に進めている（第二論考 2021b)。

私は田中正造翁が求めた真の文明は生き物の文明と同じ概念だと思い、さらに生き物の文明への希望を探すために論考を深めたい。1）日本の自然の景観・生態系と山村農人の心性の美しさを降矢静夫師のはがきのテキスト分析で明らかにしたいと思う。他方で、2）日本のムラ社会の形成過程について、自らの人生で体験してきた事実および多くの人々が田舎・都会暮らしで体験した証言（書籍、論文、書評、コメント、e-メールなど）を根拠資料としてテキスト分析などによって詳細に検証した。ムラ社会による集団的排除行為、ムラ撥撫は心に巣くう醜い犯罪だ。被害者が心的外傷後ストレス障害を治癒するには自律的に超克するしかない。山村農人に学び、美しい山村に希望を見出すために、これまで十分解くことができなかったこの課題に最期に当たって、明確な結論を示すように、挑むことにした。

すべては心の仕業、私、人間の歴史時空は常時戦場、阿修羅界にあるようだ。心の構造体としての阿修羅は現代のアニミストだ。菩薩の心にはほど遠いので(R.エイトキン禅師)、やはり人間界に属するのではない。そこでジョージ秋山の『アシュラ』(1970～1971、少年マガジン）をもう一度読み直すために手元になかったので注文した。アシュラの歴史背景は室町時代の終わり、乱世の頃、飢饉の最中で庶民は飢餓線上を彷徨っていた。この作品の最後の場面は、気が触れて病に侵され余命いくばくもない鬼母と彼女が捨てた子アシュラがともに生まれてこなかったほうが良かったと共感、哀しくも心で許し合ったのかのようだ。

もう一つ彼の作品『The Moon』(1972～1973、少年サンデー）を思い出して、確かに最終場面を切り抜いて保存しておいたはずなので、書庫を探したが発見できずに、これも古書を注文した。その最終場面とは、純粋な心の少年サンスウがカビ発生装置を破壊しようとしてカビに蝕まれてもがき苦しみながら、ムーンの名を叫び、一方、ムーンは何もできずに涙を流すのであった。この先に恐らく未来はなく、人類は滅亡に向かい、まさに絶望に終わっていた。{注：ムーンは新たな神として造られた巨大なロボットで、純粋な心を持った少年たちにしか操作ができない。} 私が大学院生で実験の合間に、水俣病患者の皆さんとともに抗議活動をしていた頃に、少年サンデーに掲載されていたのだ。それでも、私はさらに 50 年近くを生きてきた。私はこのサンスウの心を受けて、公害の象徴としてのカビ発生装置を止めようとしてきたのだろう。そのような自分の人生に不満はないが、いくつかの悔しさはある。

さらに、孫子が読んでいた『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴 2016～2020、少年ジャンプ）のアニメーションのストーリーからからインスピレーション inspiration を受け止めた（2020.5.14)。鬼は人間の心の闇の中に隠れ住んでいる。恐ろしいのは鬼よりも人間だ。何故なら、鬼の姿は見るからに恐ろしいが、人間の姿は神に似せてあり、一見では優しいか恐ろしいかはわからない。半世紀ほど前に描かれた『アシュラ』は恐ろしい描写で PTA からの意見で有害図書指定された。ところが、もっと恐ろしい描写が出てくる『鬼滅の刃』は有害図書指定などはされずに、子供から大人まで、爆発的に視聴・読者を得ている。個別作品の違いやアニメ同伴など表現や発信方法にも大きな違いはもちろんある。一方、別の視点で、大正期という時代背景も関わっているとするのなら、それはどのようなことなのだろうか。恐ろしい世界大戦の狭間の大正ロマン・デモクラシーの陰に隠され、蠢いていた鬼たちに重ねてみているのだろうか。鬼の力に勝てはしない絶望があっても、信頼で

きる友愛に依拠して抗うことに共感しているのだろうか。主人公の竈門炭治郎も阿修羅なのだろう。これらの鬼よりもっと怖い鬼は人間の心の闇に潜み棲みついているのだ。本日出た完結編では、鬼を滅した人間は現代に輪廻転生して楽しく暮らしており、ハッピーエンドになっているようだ。ちなみに、任意団体 NPO の鬼殺隊士は、廃刀令（1876）後の大正時代に剣の道に励み、鬼退治をする物語である。

現代は後世になれば歴史区分として東京時代と呼ばれるのだろう。ジョージ秋山が『アシュラ』や『The Moon』を描いた時空と、吾峠呼世晴が『鬼滅の刃』を描いた時空にはおおよそ 50 年の経過がある。前者は大学が国権力との紛争で敗退して知的権威を失い、同時に公害も激甚化する状況にあった。一方で、後者の現在はどのようにとらえたらよいのだろうか。沈黙したままの大学は抑圧され学問の不自由、原子力発電所の放射性物質公害、権力犯罪の腐敗構造にさえ異議を言わなくなった。市民社会、大方の世間も代替の権力構成を求めながら、それを見つけ出せずに不憫をかこっている。後者の吾峠は絶望の彼方に、希望を見つけたのだろうか（木俣 2020）。

その上、追い打ちをかけて COVID19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID19 の恐怖・脅えを利用して、人心を惑わし、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろう。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるように祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽だが、希望を探し求め続けたい。過去・闇世の澱みは陰湿で今でも絶望に沈んでいる。何が正義で、何が邪悪かを問うても、人々の間には強固なバカの壁があり（養老 2003）、空虚にも、越えることはほとんどできない。それでも阿修羅は永遠に抗い、挑み続ける。
2020.5.22

2.　嫉妬と保身の自律制御　　2020.5.27～6.16

悠悠たる上古、厥の初めの生民、傲然として自足、朴を抱き真を含む。
智巧既に萌し、資待因る靡し。
誰か其れ之れを贍らせし、実に哲人に頼るなり。
陶淵明（403）

誰にも嫉妬、羨望や保身の感情はある（表１）。嫉妬とは、自分よりすぐれたものをねたみそねむこととあるが、本来、この 2 文字には異なった意味合いがあり、妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつけ、嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけることであるようだ。保身とは身の安全や地位・名誉などを保つことである（広辞苑）。

嫉妬 jealousy は第三者関係において、自身の愛する人が別の人に心を寄せることを怖れ、その人をねたみ憎む感情である。羨望 envy とも同じような意味合があるが、心理学的には異なる感情である。羨望は自分以外の誰かが望ましいよいものをわがものとしていて、それを楽しんでいることに対する怒りの感情であり、二者関係に基づいている。羨望は最も原始的な悪性の攻撃欲動であり、よい対象を破壊してしまう。嫉妬は愛する対象への愛情は存在していて、よい対象を破壊することはない。羨望を乗り越えたところに発達する情緒として感謝がある。羨望には悪性と良性があると近年は考えられており、良性の羨望は民主主義へと向かわせる原動力だと B.Russell(1930)はいっている(Wikipedia2020.5.27)。

アリストテレス（前 384－322）は『弁論術』の記述で、羨望 phthonos とは他人の幸運によって引き起こされる痛みであるとし、さらに、キリスト教では七つの大罪の一つとされ、ヒンドゥー教では破壊的な感情とみなされ、歪んだ感情は克服すべきだとしている。イスラム教において羨望 Hasaad は心の不純物であり、善行を無に帰するものとしており、仏教では嫉 īrṣyā とは富や名声を得るためにひどく熱心で、他人がそれを得ることが我慢できない状態で、この解毒剤は相手の幸福をともに喜ぶ心（喜無量心）であるとしている（Wikipedia　2020.5.27)。

表 1.　心理学用語

語彙			語義	特性
嫉妬	jealousy	嫉む	嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけること	第三者関係
		妬む	妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつける。	
羨望	envy	悪性、悪意	他者が持つ優れた事物への渇望、その対象がそれらを失うことへの願望。	二者関係
		良性、昇華	社会的に認められない欲求が社会的に価値のある芸術・宗教活動に置換されること（広辞苑）	好敵手として目標に鍛錬する。 代償行動（置き換え）
保身	self-protection	自己	身の安全や地位・名誉などを保つこと（広辞苑）	自己・個人の存在を保つ。
		組織ムラ・シマ		組織の利害・損得を守る。

1）心理セラピストの見解

心理セラピスト二人の著述を要約引用し、考察を補足したい。まず、スタマテアス（2008）の『心に毒を持つ人たち』には、こうした人たちの分析と対処法のとても有効な助言が示されている。

なんでもけなそうとする有毒人間の言葉や提案にけっして耳を傾けてはいけない。あなたが夢を実現することを快く思わない人間は放っておき、目標に向かって進みつづけよう。有毒が用語として人間関係に関してもちいられるようになったのは 1980 年代からだ。罪悪感は人間が抱く感情のうちでもっともネガティブなものであり、他人を操る手段としてごく頻繁に利用される。ねたみによって人は常に不満を抱き、しじゅう愚痴をこぼし、他人が所有しているものを自分はけっして手に入れられないと感じ、信じ込むと、ねたみが生まれる。ねたみは他人の破滅を願う感情であり、獲得したものを奪い取ろうとする人はねたみを抱く。他人の成功が原因となって引き起こされる根深い反感、復讐願望の現れである。何を言おうと、真意はあなたを葬り去ることで、心の奥ではあなたに目的を達成させまいと考えている。ねたみはすべての人が抱きうる感情であり、そのことで自分自身の人生や目標を見失うようになる。健全な自己評価は他人からの承認や名声を求めることや、自己利益の追求に邁進することではなく、自分自身による承認と満足を第一に考えることだ。

中傷する人の特徴は絶賛したかと思うと、翌日にはおとしめ相反するメッセージを発して、あなたの感情、心、理性を操り、支配しようとたくらみ、まったく有毒人間の代表格だ。中傷する人の気質は支配欲が強く、かつ思考が緻密であるという特徴があり、やり口がとても巧妙である。この種の人のもう一つの顕著な気質は、自分は完璧だと考え、誤りは認めず、過失にも責任を取らない。犠牲者が譲歩すればするだけ、中傷人間はつけいる。中傷を行う人はゆっくり時間をかけてあなたとの関係を深め、全幅の信頼をおくようになり、言い換えれば、隷属関係に変わってしまう。中傷を行う人は、かつては中傷の犠牲者であった。面と向かって対決すると、彼らはうまく立ち回って無傷で事態を切り抜け、すべての罪と責任はあなたに負わせる。すべての有毒人間と手を切り、自分の道を歩むことだ。

攻撃的な人は彼らの目的に役立つあいだは友好的だが、あなたがノーと言うやいなや、何もかも妨害するので、衝突を避けることだ。計略に気づいたら距離をおくことで、その場の状況で自制心を失わないようにする。倫理観が壊れている人は犯罪者だけでなく、あらゆるところにいる。うそをついて人をだます名人で、あなたを裏切り、人生を破滅させようとねらっている。平凡な、ことなかれ主義の無気力状態は周囲への感染性を持っており、これも有毒人間だ。有毒人間は退け、変革や挑戦に対して積極的で、絶えず進歩していくことを目指す人とだけつきあうことにする。

噂とは公式な検証がなされないままに広がっていく情報、事実による裏付けがない説明だ。神経質な人はエゴイズム、ねたみ、噂話、他人との競争、賞賛願望のような態度や行動をとることにより、自分が他人より劣っているのを隠蔽しようとする。神経質な態度の背後にある目的は、他人の世話をすることでなく、他人に対する支配力と影響力を手に入れることで、他人の人生の決定権を握ることだ。理想とする職業や愛情を現実に手に入れることができなかった人の多くは、神経質な行動をとることによって、自分の能力に対する自信や、失ってしまった支配力や影響力を取り戻そうと試みる。劣等感は人間が権力を追い求めるときの主要な動機の一つで、心理学的には劣等感以上に屈辱的な感情は存在しない。

操縦する人の目的はひとえに他人を破滅に導くことにある。彼らが攻撃対象にしたがるのは愛されていて、有能で、社会的名声を持った人で、自分にはない長所が備わっていることに激しい怒りを感じ、ねたみから攻撃する。こういう人からは急いで逃げ、離れることだ。自分は人から操縦攻

撃を受けたのだという事実を正面から見据え、これ以上我慢しないと決意した時から、新しい自分へと変わる。操縦の犠牲になったからといって、相手に対する憎しみや恨みの感情を抱きながら生きていく必要はない。いつまでも引きずって人生を台無しにしてはいけない。他人に親切にしようとするあまり、自分を犠牲にしてはいけない。自分自身の考えに基づいて決定し、罪悪感や恥辱感を忘れ、有毒人間の毒から真に自由になることだ。

信念にしたがって行動する。信念は決心であり、確信だ。信念は思考から生まれ、言葉となって表明される。感情を抑え込むことは、自分自身を殺すようなことだ。感情とは今現在感じている思いで、心理状態とはかなり前から引き続いて感じている気持だ。心理状態はしばしば最終的に恨みというかたちをとる。恨みは時間をかけて育ち、言葉に出して吐き出すという必要な処置をとらない場合、最後には本人の身体に害をもたらす。有毒人間の特徴は回復困難な傷を相手に負わせ、見返りを求めない好意的行いなどはあり得ず、後悔も謝罪もせず、弁解の言葉は存在しない。有毒人間に態度を改めさせようとはけっしてしない。有毒人間に腹を立てたり、不快感を抱いたりせず、怒りに我を忘れないことだ。

ここに具体的症例をもって活写されている毒人間はバカの壁以上に絶望をもたらす。性善説は偽善になり、絶望する被害者は吾身さえも護れずに、人間不信に陥り、憂鬱から、果ては自殺にさえ至る病である。本来、毒をもつ人間こそが病人であるに、当事者は自覚できないので、毒に侵された被害者が病人になってしまう。運よく、この状況に気づいたのなら、スタマテアスが言うとおり、反論などせずに、沈黙して逃げることだ。反抗すれば、毒に満ちた嗜虐の土俵にのせられ、もちろん勝ち目などなく、被害者の病状は悪化するばかりだ。多くの症例を見てきた彼の意見に従い、性善説の甘い罠にかからず、毒人間とは極力関係を断つことだ。

しかしながら、私は研究者の本性から、一般論として毒人間の行為の事実を白日に晒して、社会の改善を求めるべく、被害者として矛盾する行為をしている。さらに、大きく抜け落ちている視点に気づいた。ここでは主に加害者の病理と被害者の応対について考えてきたが、ムラ社会を形成し、撥撫を生起させる他の役者についての論考が少ないことだ。加害者個人から発して被害者個人を害するとしても、加害同調者（共同正犯、直接共犯）、傍観者（間接共犯）、公正者、および無関心者などの役割がある。地域社会に居住しており、何らかの地域共同利害があり、社会的地位の有る知的な人々さえも、被害者個人を撥撫（いじめ）し、さらに共同絶交宣言（犯罪の罰金判例もある）をしてまで、積極的同調あるいは消極的傍観するのである。同調や傍観をしないで、せめて公正な立場をとってほしい。私は沈黙を選び、ここに消極的な同調者や傍観者になった友人たちが代替標的にならないようにし、また、他の友人たちには緘黙した。それでも、たとえ長年の友人であっても、私の信条や信仰と強く対立するか、あるいは公正性を保たず不当に関与するのなら、たとえ友人であることを失うとも、自らが納得できるように身に受けてきた撥撫の事例を検証し、優先して課題解決を探りたい。ほとんどの人々は日々の暮らしに手一杯で、なかなか、世の中を想い遣るほどの余裕はない。それでも、たとえ、ささやかな想い遣り、貧者の一燈、寸志、五分の魂を人間の誇りとして、共感する心を見せてほしい。

研究する自己個人の課題として、何らかの解決法を提示したい。自ら甚だしく傷つきながら、超克し、さらに超個人を希求するのには明確な理由がある。人生の仕事として雑穀栽培を継承するという一心不乱の強い目的意思である。この研究目的のために主要な人間関係を形成してきたので、雑穀に関する裏切行為は最も心が痛む。しかし、この目的はい

くら努力しても自分では達成することがない目標である。この仕事に継子がいなければ、日本の雑穀栽培はいずれ消滅する。それでも人生の結願に此岸の恨みを残さないと意思した。

さらに、スタウト（2005)『良心をもたない人たち』には、これらの人たちの見分け方と対処法が要約すると次のように説かれている。本書の登場人物は特定の個人ではなく、心理セラピーにおける最重要な守秘義務により、人物名は仮名、場合によっては特徴変容もし、本人とわからないようにしてある。プライバシー保護のために登場人物は合成もしていると最初に記している。

あなたは人からは頭がいい、切れ者だなどと思われ、だが、心の奥底で自分には目立った財力や独創性がなく、ひそかに夢見ている権力の高みには手が届かないとわかっている。その結果、あなたは世の中全般に怒りを抱き、周囲の人々をねたむようになる。あなたは少数の個人ないし小さな集団を自分が管理し、支配できる仕事を楽しんでいる。あなたが操作する相手があなたよりすぐれている場合はとくに、自分より頭がよく教育程度が高く階級が上で、魅力があり人気が高く、人格的にすぐれた相手を打ち負かすことは、愉快なだけではなく、存在にかかわる復讐もはたせる。良心が欠けているので、実行は驚くほどたやすい。

精神医学の専門家の多くは良心がほとんど、ないしまったくない状態を、反社会性人格障害と呼んでいる。この矯正不可能な人格異常の存在は、現在アメリカでは人口の約四パーセントと考えられている。この良心欠如の状態は一般的には精神病質サイコパシーとも呼ばれている。アメリカ精神医学会の手引にある臨床診断では以下の七つの特徴のうち少なくとも三つをみたすことが条件とされている。①社会的規範に順応できない。②人をだます、操作する。③衝動的である。計画性がない。④カッとしやすい。攻撃的である。⑤自分や他人の身の安全をまったく考えない。⑥一貫した無責任さ。⑦他の人を傷つけたり虐待したり、ものを盗んだりしたあとで、良心の呵責を感じない。

アメリカ精神医学会の定義は実際のサイコパシーではなく、単なる犯罪性を説明するものだと考えて、サイコパス全体に共通する特徴に、口の達者さと表面的な魅力を付け加える研究者や臨床家もいる。サイコパスはそれでほかの人びとの目をくもらせる、一種のオーラとかカリスマ性を放つ。トラウマを抱える患者たちは慢性的な不安、無気力な鬱状態、統合失調症的な精神状態に苦しみ、この世で生きていくのは耐えられないと感じ、自殺未遂の患者も多かった。心的外傷を負った患者の大半は、悪意の個人によって支配され、精神的に蹂躙された人たちだった。

サイコパスは自分が道徳や倫理に反した行為や、怠惰、利己的と思える行為を選ぼうとしたとき、それを抑えようとする内的メカニズムに欠けている。おおよそ九六パーセントの人には良心はあまりに当たり前で、意識もしないうちに働くから、いかに想像力を働かせても、良心のない人間の姿を思い浮かべることはむずかしい。自分の行動が社会、友人、家族、子どもたちにおよぼす影響を、完全に無視できる状態とは、どんなふうだろう。良心をもたない人は自分自身と、自分の生活に満足していることが多い。そのため治療法がない。専門家の助けや支えが必要なのは患者だろうか、それともその身近で耐えている人びとだろうか。良心は何のためにあるのか。とりわけ現在、世界は地球規模の不正取引、テロ行為、遺恨戦争で自滅しかけているように見える。その質問に心理学者として答えた。

基本となる五つの感覚が肉体的なもので、第六の感覚が直感だとすると、良心は第七の感覚と言えるだろうか。人類の進化の中で遅く開花した感覚で、今だに万人共通にはなっていない。良心は他者への感情的愛着から生まれる義務感である。第七の感覚はおもに愛と思いやりにもとづいてい

る。良心のない人が妬み、ゲームの中で破壊したいと望むのは良心をもつ人の人格だ。教育は良心を働かせるための一つの要素にはちがいないが、教育程度が人の良心を強くすると考えるのは思い上がりであり、大きな誤りだ。

標的にされたとは夢にも思っていない相手に報復することが、強欲なサイコパスの人生でもっとも重要で、もっとも優先順位の高い行動になる。こうした人間は私たちの日常の中で身近に存在するが、その行動は気づかれないことが多い。私たちはまったく害のない相手に、だれが危険で邪悪な復讐をくわだてるとは考えもしない。強欲なサイコパスのとる行動はあまりに突飛で、あまりに理不尽なことが多いため、それが意図的とは考えにくく、起きたことさえ信じられない。他者には個人的対立にすぎないと思われてしまう。サイコパスはどんな社会的契約も尊重しないが、自分の利益のためにそれを利用するすべは知っている。サイコパスのとった行動はあなたの落ち度、責任でもない。あなたが責任をとるべきものは、あなた自身の人生だ。ふつうの人たちにとって、しあわせは愛すること、より高い価値観にしたがって人生を生きること、そしてほどほどに自分に満足することから生まれる。

良心の大きい人たちに共通する特徴は確実性、積極性、自己と道徳的目標との一致、である。良心が大きくなると、人間の精神をプラスの方向で統合し、生活の破綻を引き起こしたりせずに、人生の喜びを高めていく。良心は母なる自然の良き贈り物だ。その価値は歴史を振り返っても、また身近な日常の中でも、貴重なものであることはまちがいない。

良心のないサイコパスが身近に実在し、気がつかないうちにその毒に侵され、いつの間にか、自分があたかも精神を病むような状態、心的外傷後ストレス障害に陥り、しかも 1 年以上も囚われるとは思いもしなかった。良い家族や師友がいなければ、人間不信の憂鬱は死に至る病、いままで熱意をもって行ってきた任意活動の信頼が卑小な支配欲によって崩される絶望に堕ちこんだことだろう。しかし、このような一般的害悪を研究課題として深く論考する機会にすることにした。残り少ない余生の道草かもしれないが、スタウトが言うように、第 7 感(良心)が進化の途上にある心の機能であるとするのなら、ホモ・サピエンスの進化史を問わねばならないことになる。これは第四紀の人間と植物の関係における進化学の課題でもある。

私にももちろんいくらかの嫉妬心は有ることを認めるが、嫉妬心を好敵手への競争心に変容して鍛錬すれば、自己を高めることができるとして自律してきた。他者からの嫉妬感情を軽減するために、個人的保身として謙虚で礼儀や誠実を心がけて、地味に質素に暮らして回避するようにしてきた。といっても、自己の心はある程度自律できても、他者の心は如何ともしがたいので、数多く嫌な思いはしてきた。想い遣り（教養）を大切に行為してきたが、このことは職業病的に逆転して受け止められて、融通は利かせず、高慢な人間だと受け止められていたのかもしれない。他方、羨望という感情に対して私はこれまで有難いことに無意識であったので、今改めて認識を得ることになった。恐らく、子供のころから個人主義的(individualistic)で、正直に言えば、自分の内面に強くこだわり、他者個人にはあまり関心がなかったのかもしれない。社会的な課題も自分事にしてきたとはいえ、わがままselfishで、興味ある特定の事象以外には関心が薄かったのだろう。

しかし、このように自分を責めてみてきたが、どうもこれだけではまだ心の苦痛から逃れることはできない。あるいは超克に苦しんでいる自己は自らを超えようと意思する拡大自己であり、すなわちトランスパーソナル超己な自己、いいかえればこれも第 7 感良心の

なせる機能なのだろうか。シッダールタ（ヘッセ 1922）や幸福の王子とツバメ（ワイルド 1888）の良心の苦痛と同じなのだろうか。世界の苦を我がものとする良心を縮小するか捨てれば、彼らは何も知らないで幸福の王子のままで、解脱することも、天に召されることも必要は無かった。私も幸せな個人でいられるのだ。支配欲の巨大悪と卑小毒に苦しみ抗う人々に共感しなければ、目を閉じさえできれば、超克せずとも、心の苦痛から逃れられるのかも知れなかった。

他方で、フォックス,W.(1990)はトランスパーソナル心理学を次のように紹介している。この中で、エイトキン禅師が、「菩薩の理想こそ、われわれ人類が生きのびる唯一の希望である。貪欲と憎しみと無知の三毒がわれわれの受け継いできた自然と文化を破壊しつつある。地球市民としてラディカルな菩薩の立場に立てないかぎり、われわれはまっとうな死さえ迎えられないだろう」と言っていることも引用されている。{注：radical/fundamental、根本的・基本的}

トランスパーソナル心理学は、人間性心理学の中心的役割を果たしていた A.H.マズローと A.J.スティッチによって提起された。歴史的に見たときに、人間性心理学は、行動心理学およびフロイト心理学と、トランスパーソナル心理学とのちょうど中間に位置する。理論面からいうと、人間性心理学は、行動主義心理学およびフロイト心理学における機械論的・還元主義的な狭い人間本性のとらえ方に対する批判としてはじまった。これまでの心理学は人間の弱点や病、罪深さといったものを暴き出したが、潜在的可能性や美点、抱負、心理学的に達しうる最高の状態といったものにはほとんどふれていない。積極的・肯定的な心理学は、行動心理学が強調する適応にかかわって創造性を重視し、フロイト心理学が強調する神経症的惨状の改善にかかわって、心理学的な健康と自己充足を重視することになる。

マズローの理論は、人間の欲求が五段階の階層構造をなしており、これを基本的欲求とメタ欲求とに二大別した。基本的欲求は、生理的欲求、安全への欲求、愛の欲求、所属の欲求、承認欲求で、これより上位のメタ欲求は自己実現欲求と呼んだ。彼は晩年になって、単に健康な自己実現者と自己実現超越者とを区別するようになり、第六段階として自己超越欲求を加えた。自己超越者とは、自我や自己、アイデンティティといったものをたやすく超越し、自己実現を乗り越えられるような人々である。第四のトランスパーソナル心理学は、トランスパーソナルで、トランスヒューマンで、人間の欲求や関心より大宇宙を中心に置き、人間らしさ、アイデンティティ、自己実現といったものさえ乗り越えるに違いないとした。自己感覚というのは、心や世界のさまざまな側面のうち、われわれがふつう他者ないし非自己ととらえるものを含むところまで広がることができる。

訳者の星川は、トランスパーソナル・エコロジーの道しるべとしては、洋の東西を問わず、地に足がつかない上層文化より、各地の先住民文化に伝わるもっと素朴な生命世界との同化の方がふさわしいと思えてならない、と記している。

2）保身について

苛酷な現世で人生を暮らすには、他者を傷害しない程度には保身が必要だ。しかし、過ぎたるは及ばざるがごとしというように、個人としても保身が過剰になることを回避し、誠実でいたい。大小の権力犯罪は、自己個人やムラ社会集団の過剰な保身のために、事実を歪め、隠蔽し、さらには虚偽を流布することなどにより、騙され、見逃されてしまう。

何とか自由に楽しく生きるには、心の構造を整えて、自律する心を鍛えなくてはならな

い。私の保身方法は、マスメディアに露出せず有名にならない、役職を謝絶して社会的地位を回避することであった。この世では名声や地位を得ないと、作品が普及し、必要かつ正当な評価を得ることはできない。でも、過大な名声や地位を得れば、自由な学びや家族との幸せな時間を失う。しかし一方で、学問は自己の嗜みだが、これを税金により賄われる職業としていたからには、その成果を、社会的責任として人世のために役立たせなくてはならない。この矛盾を慰めるために、三浦梅園の「人生恨むなかれ人知るなきを。幽谷深山華自ずから紅なり。」を座右にして、社会的立身と保身の過剰を戒めてきた。また、三浦は「学問は飯と思うべし」とも言っている。

研究者の研究姿勢を概観してみると、①書斎に籠り文献調査をもっぱらとする、②実験室に籠り科学分析や他者・公的機関の収集したデータ解析をもっぱらとする、③植物園・圃場に出て野外試験をする、④自然に出て観察や測定調査をする、⑤地域社会で参与観察や聞き取り調査をする、⑥地域社会で課題解決の活動をする、⑦社会的課題を解決する方策を提案する、などに類型化できよう。①や②では現場・現実に身をさらすことはない。③から以降の姿勢では次第に現場での調査研究することになるので、地域社会や社会政策にも身をさらすことが多くなる。現場の現実を参与観察から、さらに参与提案活動にまで踏み込むと、地域社会の有力者らの嫉妬・羨望に晒されることになる。その結果として、ムラ社会からムラ撥撫を受ける危険が増す。さらには、思想信条の異なる人達からも社会的論難を受けるだろう。

大方の研究者は研究成果を上げるための効率性を第一に、危険が十分に予測できる現場には出ないように保身を図る。つまり、多くの研究者にとっては、その上の参与提案活動はもってのほか論外で、そこまでして社会に尽くす必要があるとは思わない。これは当然の保身である。ところが、私は長期に渡って定点参与観察を行うばかりか、社会政策や法案の基礎調査、政策提言にも関わり、一般の研究者とは大きく異なる研究方法論を現場で実行してきた。社会を信頼して正当な保身までも行わずに、度重ねて危機に瀕しながら、なおも生の心身を現場に晒してきたのである。その結果として、社会寄与への努力がムラ社会の過剰な保身と嫉妬によって無力にされたことへの虚無を耐えねばならない。

人世における虚無と便利も、現代社会文明の根底にある心の在りようだ。これらも過剰になると、心の構造が一層大きく歪み、心の機能を自律できなくなる。現代の科学技術の便利をどこまで受け入れ、過剰の境界を決めて、自律するかだ。ＩＴＣ技術は研究資料の分析に使用する。しかし、日常の暮らしにおいて携帯電話を持たない、ＳＮＳには加わらない。私がこれらの過剰便利に支配されれば、心は病んでさらなる虚無に蔽われてしまうだろう。

3）教養を磨く

良心が第七の感覚とするのなら、教養を磨き、想い遣りの心を深めることは良心の鍛錬だ。五感が心の構造を形成する各知能の発達基盤であるのなら、第六感（直観）は一般知能を流動させ、第七感（良心）はその核心が教養（想い遣り）ということなのだろうか。やはり、上の引用（スタウト 2005）のように良心を持たない人が 4%いるという現実は高学歴がすべての人々に教養を保証してはいないということだ。先天的な素質というものはあるが、一方で後天的に五感も第六感も、さらに第七感こそ鍛錬が必要である。

他者の内なる毒を制する方法はない。自己の毒は教養を高めることで自律制御し、自家中毒を防ぐことができる。学ぶことを望む人は他者から教養を高める方法を受け取ること

ができる。しかし、他者に教養を伝える意思を示し手助けはできるが、他者に受容を要求することはできない。すべては個人の自由な所業にあり、当人が望むのなら誰もが阿修羅のごとく自ら励むしかない。私が思うに、阿修羅は人間としての苦しみを自らの課題として終始戦い（学び）に明け暮れ、人間道や畜生道だけではなく、阿修羅はすべての六道に移動できる存在ではなかろうか。

アシュラ阿修羅はインド神話における鬼神の一種で、サンスリット語 asura の写音、アーリア人のインド・イラン共通時代にはアスラとデーバ deva は共に神を意味し、彼らが分かれて定住してからはインドではアスラが悪神を、デーバが善神を意味するようになった。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。神 deva と阿修羅の闘争はインド文学のよいテーマとなった。阿修羅は初期仏教の五道にはなく、阿修羅は天道や餓鬼道に含まれていたが、大乗仏教になって新たに修羅道が派生して六道になり、三善趣の下位に位置付けられた。阿修羅は原初の古い神であり、ヒンドゥーでは敵対する鬼神となり、佛教では改心して守護神に位置付けられている（Wikipedia、世界宗教大辞典 1991）。アシュラは本来系統の異なる神であって、古くは邪悪な存在とはされておらず、たとえば、乳海撹拌の時はヴィシュヌ神らと協力しており、リグ・ベーダの暴風雨神ルドラもアシュラの一種であり、否定的な意味はなかった。インド神話が先住民との闘争史を反映しているのならば、アシュラはアーリア人に対抗した種族と考えられる（長谷川 1987）。

3.　心の構造と機能

絶望は精神におけるすなわち自己における病である。
人間とは精神である。精神とは自己である。
自己とは自己自身に関係するところの関係である。
（キルケゴール 1848）
逃げることができない出口なしの世界は、恐怖である。
そして、自分が悪意のターゲットにされたときの絶望。
人類はこのはらわたがねじれるような現象に苦しんできた。
（内藤朝雄 2009）
絶望の中にあっても、いつもお互いのことを想い、
私たちはもっと強く生きなければなりません。
生きてさえいれば、希望があります。　（周庭 2020）

今までに私は次のことを考えてきた。これらを踏まえて、さらに続きの考察を進めたい（黍稷 2017）。

黍稷農季人は三つの謎を解きたいと言った。第 1 謎は、何故、現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。第 2 謎は、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。第 3 謎は、何故、地域住民は地域のために自由民権活動をした人々、また郷土を守るために戦死した人々を沈黙して助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだのか。

また、文福洞先斗はこの謎を解こうとして、次のように応じている。第一の謎の解、過剰な都市

の便利に幻惑わされて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。第二の謎の解、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたと為政者に解釈されると、彼らの領分を侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。第三の謎の解、明治維新の功罪のなかに隠蔽された「重罪」である。自由民権｛運動｝の徹底した弾圧（治安維持法）が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。また、足尾銅山鉱毒事件などは常民・市民を守るべき為政者に虚偽・隠蔽によって抑え込まれてきた。

山村の人口が著しく減り、限界自治体崩壊の危機にあるのに、村の為を真摯に思い、活動する人々を迫害するなんておかしいと思う。これまでいろいろな排除経験を受けてきた。志ある都市民・山民は仲良くしているのに、為政者は何故仲良くできないのだろうか。追放・排除の理由を考えてみた。①都市からくる若者の活動への猜疑的排除、②不特定の都市民の頻繁な来訪忌避、③都市民への不要な劣等感、屈折した嫉妬心、④地域内の土地所有や権力争い、⑤思想信条の対立、政治党派や私欲利権争い、⑥個人の人柄への感情的好悪など。

これらの負の課題を解き、山村に豊かな暮らしを創るにはどうしたらよいのだろう。寛大な心で、自律した友愛を育ててほしい。このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同するが、実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心の形を、V.ゴッホ（1990）の言うような｛日本人へと｝、大らかに咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。

1）心の構造と機能

さて、私は雑穀と環境学習の研究として、45 年ほど、山村にかかわり続けて、多くの村人から温かい親切と助力を受けてきた。でも、その地に定着し、10 年ほどして、村人と親しくなり、信頼を得て活動が軌道に乗ると、何故か私たちは村の有力者から撥撫を度重ねて受けてきた。私は山村やそこで暮らす人々が好きで、それでもめげずに、自ら意思しては決して逃げ出さないと村人に約定して、山村に通い続けてきた。何故、撥撫という事象が起こるのかを、内省的に考え続けてきた。研究者としてこのことを解き明かさないわけにはいかない。私たちの真文明に向かおうとする内なるトランジションを阻害し続けてきた問題だからだ。人間の心の構造や機能の課題なのだと考えるようになった。心の構造において、良心すなわち教養を鍛え、自律する心の動的平衡を保持するのだ。

心の構造は生まれながらの遺伝的素質にもよるが、それでも生れてから後天的に鍛錬することによって一層発達向上する。心の構造はその機能としての五感、第６感（直感から直観）、さらに第７感（良心）によって平衡が保たれていることに考えが進んだ。この文化的進化を教養（想い遣り）の獲得、洗練化と理解したい。構造は形態的に支えられ、機能は生理的に働き、これら構造と機能は社会環境において生態的に保たれ、その統合された心は個人の特性として分類される。心の構造については既に論考したので（木俣 2019）、ここでは心の構造を統合に導くような心の機能について新たに論考を加えたい。

2）ムラ社会といじめの仕組み

歴史的な課題は、日本の人々の相当数は個人主義的に生育せずに、野蛮にも利己主義的に記憶力競争の受験体制により教育されて、これら相違する信条を区別することができていないことにある。閉鎖的集団（群れ）、ムラ社会は洋の東西、田舎・都会を問わず、どこにでも形成される。人間の心の構造に巣食う病弊、負の機能である。ムラは村を意味するのではなく、閉鎖的集団を意味する。村は小さな地域だから、ムラ社会が目につきやすいだけで、たとえば、イギリス（ヴェラ、バーナビー警部、ルイス警部）やフランス（絶景ミステリー）などのテレビ・ミステリーを見ていても、ムラ社会が形成され、撥撫いじめが発生し、この犯罪による不幸が起きている。山村の自然と生業文化は好きだが、ムラ社会の撥撫（いじめ）はきっぱり拒否する。

しかしながら、イタリアの小さな村の物語シリーズを見ていると、私が希求してきた素のままの美しい暮らし sobibo と良く合致している。イタリアの小さな村の物語の番組概要は次のように記されている。毎回見て、家族の情愛の深さに涙が出てくる。村で暮らす親たちが子供たちを都市の大学に進学させ、子供たちは都市で高給の職業を得ても、いずれ故郷に戻り、家族と共に過ごすことを大事にしている。日本と似たように山や海に近い暮らしでありながら、イタリア人は故郷を大事にしている。日本人はどうして小さな村を打ち捨て、家族を大事にしないのだろうか。自分を支えてくれている家族や師友からの温かい好意、心情を想い出すことだ。あなたや私は素のまま、美しく暮らし、幸せに生きていてよいのだ。生活信条や信仰に支えられて、信念を真っすぐに生きてよいのだ。

美しく生きるということ。気候や風土に逆らわず、共存しながら暮らす。先人たちが築き守ってきた伝統や文化を誇りに思いながら生きる。人間本来の暮らしが息づく小さな村が今、注目されています。海を望む小さな漁村、山肌にはりつくように佇む村、雪に覆われた山間の寒村・・・。古き良き歴史と豊穣の大地を持つイタリアで、心豊かに生きる人たち。豊かに暮らす、美しく生きる、とはどういうことなのか。私たちが忘れてしまった素敵な物語が、小さな村で静かに息づいていました。番組ではありのままの時間の流れを追い、村人たちの普段着の日常を描いていきます。

新たな用語ムレ（群れ）社会の定義を思いついた。ムラ社会は村を想起させ先入観による田舎への偏見を助長させてきた。したがって、ムラ社会を定義し直して、ムレ社会と表現する方がよいのではないかとも思うが、しかし、小さな地域社会の方がムレ社会の形成が実態的に働くので、逃げ場のないムラ撥撫が生じる。つまり、田舎の小さな地域社会の濃い歴史性を負ったムラ社会形成と都市の歴史性が希薄なムレ社会は幾分かの差異があるのかもしれない。都市では、隣の人は何する人かもほとんど問われないので、逃げ場はある。都市ではムラ社会が形成されないと言っているのではない。都市でも古くからの土地所有住民のムラ社会（地元神社の氏子など）は隠然としてある。それでも、それにはかかわらないで暮らしてはいける。また、多様なムレと同時に関係を結ぶことが出来るので、都市の希薄な人間関係が、この場合は良い意味で一次的な引き籠り、逃げる場所にもなり得る。

ところが、学校、会社、あるいはいろいろな社会集団が閉鎖的であると、これらの中にいろいろなムレ社会、いじめグループ、学閥、派閥、ムラ、シマ、隣組、などが出来る。人間社会では普遍的に群れができるのであり、当然ながらムレ社会はその構成員と非構成員にとっても正邪の両義性をもつ。閉鎖的集団としてのムレ社会で、撥撫（いじめ）の対象にされると、被害者が自分に落ち度があるのではないかと、自分を責め心身の痛みが生

じる。ひどい場合は鬱屈して病み、自死に至る。こうした心身の痛みを快復するには、社会的自立、心理的自律するように、超克することである。

内藤朝雄（2009）から要約引用する。いじめは日本の学校だけで生じる問題ではないが、ここでは、主に日本の中学校における具体的な事例からいじめの生態的分析を行っている。

①群生秩序；群れの勢いによる秩序。空気を読め。みんなから浮いているにも関わらず、自信を持っている者は、ものすごく悪い。普遍的秩序は反感と憎しみの対象になる。面白いからイジメる、遊びであればすべてが許される。
②市民社会の普遍的秩序；普遍的な理念やルールを組み合わせて市民社会の秩序が編成されている。中心部分は人権、尊厳、自由、平等、などである。
③小社会の秩序、学校；事件の当事者を孤立させる。拒否すると村八分とわが子の差別を覚悟しなければならない。人の魂を深いところから奴隷化する、陰惨な秩序を感じる。生徒たちは濃密に付和雷同して生きている。人道に反する学校らしさが問題だ。人間の死を軽く見る傾向や、個人と個人の間に信頼関係が全くないにもかかわらず濃密に密着し合っている傾向、学校共同体では結局個人の責任は生じない。

いじめが成立するためには、①加害者の嗜虐意欲、②加害者による現実の攻撃行動、③被害者の苦しみという三つの要素が必要である。この三要件を概念の中心に位置づけて、いじめを三段階に分けて次のように定義する。①最広義の定義 A:　実効的に遂行された嗜虐的関与。②広義の定義 B:社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与。③狭義の定義 C:　社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、かつ集合性の力を当事者が体験するようなしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与。いじめの中核群は、群れたみんなの勢い、あるいは自分たちなりの特殊な秩序を背景にしたタイプである。すなわち、定義 C に類型化されるいじめである。

いじめの加害者は、いじめの対象者にも、喜びや悲しみがあり、その人自身の世界を生きていることを承知しているからこそ、その他者の存在を丸ごと踏みにじり抹殺しようとする。いじめの加害者は、自己の手によって思いのままに壊されていく被害者の悲痛のなかから、全能の自己を生きようとする（全能筋書）。被害者がいじめられるのを拒否すると、加害者のほうがこのような態度をとられたことに、独特の被害感覚、屈辱感、激しい憤怒を感じる。全能の自己になるはずの世界を壊されたとして、被害者に対して復讐をはじめる。

いじめは日本特有ではなく、世界共通あるいは人類普遍の心理―社会的なメカニズムによって蔓延し、世界共通（人類普遍）の心理―社会的なメカニズムによって減らすことができる。

各人の人間存在が共同体を強いる集団や組織に全的に埋め込まれざるをえない強制傾向が、ある制度・政策的環境条件のもとで構造的に社会に繁茂し、遍在している場合に、その社会を中間集団全体主義社会という。人々を直接的に苦しめる主要な力は、国家権力や市場の貧困化力というよりも、「生活の細部にまで浸透し、霊魂そのものを奴隷化する（J.S.ミル）」ローカルな秩序の作用である。内側から自分を変えてしまう場の変形力が、自己構成的な中間集団共同体＜世間＞にはある（注:自己が自己である仕方まで、当人の制御が及ばないところで、いつの間にか作りあげられる）。この侵食作用は、自分に対する不信感や嫌悪感や無力感や、場のなりゆきに対峙する自己であることへのなげやりさを蓄積させる。

戦時中の隣組制度により地域コミュニティの自治と共同の過酷な強制が行われた。公に献身する共同体的様式が強制されると、今まで潜在化していた妬みや悪意が解き放たれた。適度に物象化された市場と法に隔てられて、各自が適度な距離をおきながら私的な幸福を追求していたころには、決して起こらなかったようないじめが頻発した。国家が個人を直接圧殺する全体主義ではなく、わ

れわれの強制的な献身要求、献身を自己のアイデンティティとして共に生きる心の強制、われわれの共生を離れたプライベートな自由や幸福追求への憎悪、これらが草の根的に沸騰する共同体的専制による全体主義である。

必要なことはこのような社会に名「中間集団全体主義社会」を与え、このような社会に生きる人々の構造的な苦しみの諸相を明るみに出すこと、さらに、この全体主義の苦しみに着目したやりかたで、自由な社会の構想を描き、社会変革へとつなげることである。人間が人間にとって怪物になる現象を説明する。これは人類の歴史のあらゆる時代、あらゆる地域に当てはまる普遍的な現象である。私たちに共通の痛みの経験から、もっと恐ろしい大人の普遍的な現象を理解し、それを止める方策を練る必要がある。小権力者は社会が変わると別人のように卑屈な人間に生まれ変わった。状況次第で人が変わってしまうのは情けないが、このような豹変を希望の論理として受けとめる。適切に制度・政策的な環境条件を変更すると、小権力者が卑屈な人間に生まれ変わり、愛想のよい近所のおじさんになる。結果として、多くの人々が隣人＝狼の群れから被害を受けずにすむようになる。群れた隣人たちが狼になるメカニズムを研究し、このメカニズムを阻害するような制度・政策的制度設計をすることだ。

浅野の聞き取り調査によれば、いじめにかかわった中学生は遊びだから、被害者を自殺に追い込んだとういう罪の意識はない。みんなのいま・ここは重く、個人の命は軽い。彼らにとってもっとも悪いことは、みんなが共振し合うノリの世界にひびを入れることである。彼らは人権やヒューマニズムを生理的に嫌悪する、とまで述べている。

たまたま、検索にヒットした小説『あたしたち、海へ』（井上荒野 2019）を読んでみた。女子中学生の集団的いじめの構造とその顛末を描いたフィクションで、中途半端な物語だが、事実を単純化していてとても判りやすかった。友情を支配、分断され、自殺（ペルーに行くと象徴的に言い換えている）寸前にまで追い込まれていくが、父親の住んでいる海外のペルーに転校するという母親の提案で、解決できないいじめにあっている 3 人の女子中学生はとりあえず友情を再確認し、自殺を思いとどまるところで物語は終わっている。悪なる者はそのまま悪いままにしておけということか。

いじめをする者たちと関係を断つことが、良心ある善人が自らを護る現実的で最良の対処法だろう。しかし、いじめを続けている小集団、対応を忌避した教員・学校に対しては何の解決策もないままである。学校は人間関係を形成するところではなく、人間関係を壊すところのようだ。

良心を持たない毒人間と、その毒に侵されていじめに加担する者たち、次の標的になることを怖れて傍観無視する者たち、ましてや、被害者にも落ち度があると非難する者たち、絶望的に解決はない。しからば、とりあえず、学校から逃散するしかないのではないのか。

人間性善説によって、制度・政策を作れば、いじめはある程度回避できるということには合意する。しかし、良心を持たずに毒を溜め込んだ人間は少数でも存在するということを事実として前提とせねば、根本的な解決策はあり得ず、いじめはなくならない。マスメディアの過剰反応は毒を持った人間の嗜虐に沿うので、事実に憶測の尾ひれを付けるような報道はやめるべきである。{注：嗜虐、残虐なことを好むこと（広辞苑）}

私は子供の頃から、だれの子分にもならなかったので、いじめられっ子だった。理由は肌の色が小麦色だとか目が大きい、あるいは和菓子屋の子、きっと貧乏であるとか、である。原日本人の私が、黒人として差別されたのだ。教員は大方助けてはくれなかった。それでも、友人がいたので孤立することは無かっので、毎日、泣きながらも抵抗した。子ど

もの腕力は必死になればさほどの違いは無いので、番長にもダメージは与えられたから、いじめ集団は私へのいじめをやめた。したがって、私は根に持ち復讐しようなどとは、有難いことに、今まで思ったことはない。人種や民族など、あるいは身体的特徴など、私は子供の時から差別を嫌悪し、当時の教員という職業も嫌いになった。このために、アフリカに行って、シュバイツアー博士の手伝いをするとの志をもった。それでも卒業式には「仰げば尊し」を歌うように強要された。しかし、本当に良い師も少しはいてくださったから、今でも恩義は思い出すし、良い友人もいたからその友情への恩も想い、もちろん忘れてはいない。学び、励むことは望むが、しかし、立身出世主義はもう沢山で嫌いだ。因果なことに、東京学芸大学に職を得て、教育学の研究も責任をもってしてきた。しかし他方で、異質な抗いをしながらも、環境学習原論をまとめて職業的責任を果たし、これで充分自己満足したのだが、できればラジカルな教育方法論として、さらに正直に言えば、いくらかでも学校関係者や保護者に普及したかった。ありがたいことに環境学習原論を幼年者・保護者向きに描く機会を頂いたが、その本質は生きている（木俣監修 2017）。

仰げば　とうとし、わが師の恩。互(たがい)にむつみし、日ごろの恩。別るる後(のち)にも、やよ　忘るな。身を立て　名をあげ、やよ　はげめよ。

私は知性、良識の府である東京学芸大学の中でも学閥や分野領域に形成されるムラ社会をいくつか見てきた。それには加わらないで、無所属、自由にふるまってきた。ムラ社会（ムレ群れ）による、私への反感の理由は、次の事柄がエリート意識と受け止められたことによるものだろうか。わが師の学恩に対して師弟の礼を重んじてきた。この師は自ら選んで師事し、学校に入って選ぶこともなく、決められていた先生のことではない。こうしたアカデミック・ファミリーなどというものは、古い考えで、これも学閥という一種の群れなのだろうか。それでも、学術調査（探検）に同行した人達のことは、たとえは悪いが、軍隊でいうところの戦友のようなものなのだろう。さらに、親炙する師は現世でも広く求めるべきであり、また、古典書によって何百年も前の師にも私淑することができる。古典書は良心を鍛え教養を高める力を秘めている。学校制度で押し付けられる教員が師のすべてではなく、自ら人生の師を求め探すべきである。

醜い為政者たちに対して異議申し立てをする、マララ・ユスフザイ、グレタ・ツンベリーや周庭が多くの若者たちから共感されるのは、純粋な志と勇気を見るからだろう。国制度のすべてが悪いわけではない。権力者が名利を求め、過剰な出世や保身のために、自由、平等、友愛あるいは民主主義という文化的進化、すなわち良心の発達を阻害することが悪徳の栄えになるのだ。巨悪な権力犯罪の野蛮に対して抵抗することは英雄的である。恐怖を超えて精神の高揚がある。巨大な権力者に立ち向かい、恐怖にふるえながらも、信念を曲げない。香港の若者たちの自由な社会を求める勇気ある抵抗に強く共感し、高い敬意を持つ。私の青春も同じだったが、その時に敬意すら感じていた中国や北朝鮮が今では香港市民の自由を封殺しようとしている。隠蔽されていた共産主義社会の現代史的事実も知らなかったことを、今更ながらにとても恥じ入る。さらに加えて驚いたことに、ベラルーシでは、市民から庶民の現代史について穏やかに聞き書きをしてきたアレクシエーヴィッチが現政権に反対する代表的な良心ある人になってしまっていることだ。日本を訪れたときに、彼女は、「今、ベラルーシでは政府に対する反対派が忽然と行方不明になったりしている。自分も危ないとは言われているが、こちらが臆病風を吹かせなければ手を出されない」

と言っていたと聞くが、いよいよ権力犯罪の危険が迫っている。（アレクシエーヴィッチ 1985）。

それに比べ、この日本では内外の状況にほとんど無関心で、いつまでも内向きで卑小な中間集団全体主義社会（群れ）が良好な地域社会の形成を阻み続けるのだろうか。日本の市民の知的水準が衰微し、第六感（直観）は発育せず、第７感（良心）も衰弱しているのは、偏に強要する学校教育の実際的退化によるもので、自ら意志して学習することを阻害しているからだろう。善良な市民は多いが、邪悪に流される人々も少なくないのだ。増殖するイジメの心毒を自律超克して治癒せねば、日本はこのまま引き籠りや自殺が多く、悲惨な社会状況を続けることになるだろう。

この卑小な権力という精神風土は半千年紀の間に形成されたのだろう。天皇公家と武家とを併存させた二重権力の無責任政治機構、喧嘩両成敗、刀狩りで庶民の武装解除をして抵抗を失わせ、幕藩体制で逃散を防ぎ、五人組、檀家制度という行政末端支配で、常民間の相互監視や連帯責任を日常化してしまったのだろう。さらに悪いことに、キリスト教を禁止、一向宗を弾圧までし、社寺が行政と一体化して真の信仰心まで衰微させてしまった。

しかし、独裁専制権力の野蛮な巨大暴力とはまったく対照的に、いじめなどという心の機能不全は卑小な野蛮だ。こんなことで行動を阻害され、自らの心をも苦しめるようなことは、鬱屈としてとても嫌になる。しかし、これが毒に侵されて自律できない人々の悲しい野蛮とするなら、情けなくても、哀れであっても抵抗するしかない。この毒を解かなければ、楽しく幸せな個人、家族や地域社会を形成し、維持することはできない。歴史的閉鎖性と地理的閉鎖性をせめて半閉鎖性にまで移行させたい。

支配欲を制御しない巨大／卑小の権力者は、心の機能が幼形成熟｛注：ネオテニーの類推｝して、発達阻害・転換したのだろうか。ホモ・サピエンスがホモ・ネアンデルターレンシスを三万年前までに残虐にも絶滅させた頃の心の機能のままに退行進化し今日までサピエンスの 4%が、第七感（良心）の発達を忌避したのだろうか。サピエンスは残虐性を芸術や宗教などの文化的進化で昇華、置換して、良心（想い遣り）を確かに発達させてきた人々は多い。しかし、良心などもち合せれば、熾烈な社会では生き残れないので、サピエンスは良心の未発達な野蛮の人々を 4%ほど残しているのだろうか。こうした良心のない現代の野蛮人が、情報科学技術や生命操作技術を悪用する新人類ホモ・デウスとなり、サピエンスを隷属させていくのだろうか。

人生の大半で性善説を信じて暮らしてこられた。短い人生でも、少しはいやな人々はいたが、まあ、乗り越えられてきた。しかし、性善説だけでは解釈できない、明らかに悪なる毒を持つ人間はいるのだ。これを前提にして、地域社会の在りようを論考すべきだ。綺麗ごとだけでは課題解決はできないのだ。聖ヨハネの黙示録に、「天使は、不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。」と言ったとある。また、キルケゴール（1848）は次のように書いている。絶望に至る病は、超克の努力によってしか快復には向かわないということか。つける薬はなくとも、支えてくれる家族や師友はいる。疲れれば休めばよい。その現場から逃避してもかまわない。

人間とは精神である。精神とは自己である。自己とは自己自身に関係するところの関係である。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然との、綜合である。人間とは綜合である。総合とは二つのものの関係であり、第三者の関係など派生的な措定された関

係が人間の自己なのである。自分ひとりの全力を尽くして自分の力だけで絶望を取り去ろうとしているのなら、なお絶望のうちにあり、その苦闘はかえって深刻な絶望のなかに引摺り込む。絶望における分裂関係は単純ではないので、同時に他者との関係を措定したところの力との関係のなかで無限に自己を反省するのである。絶望が全然根扱ぎにされた場合の自己の情態は、自己が自己自身に関係しつつ自己自身であろうと欲するに際して、自己は自己を措定した力の中に自覚的に自己自身を基礎づける、ことである。

4. 社会ダーウィニズム

さて、また世俗の不学・無学の話題に戻る。自由民主党の「憲法改正ってなあに？」の漫画第 1 話で、次のようにもやウィンが言っている。「ダーウィンの進化論ではこういわれておる。最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である。」多様な生物の進化を簡単な法則性に集約することはできない。ダーウィンはそのような事を言ってはいないし、彼以後も進化学は大きく発展しているので、単純な社会進化論の繰り返しの適用は無学をさらして、無恥であるので、慎むべきだ。あまりに見かねた日本人間行動進化学会（会長・長谷川真理子総合研究大学院大学長）は「生物進化がどのように進むのかの事実から『人間社会も同様の進み方をするべきである』とする議論は間違いだ」と反対する声明を出した。

声明は「ダーウィンの進化論は思想家や為政者に誤用されてきた苦い歴史がある」とし、権力者らによって差別や抑圧に悪用されてきたことを紹介。科学者は警鐘を鳴らしてきたが、現代でも特定の政治的主張に権威を持たせるための誤用が後を絶たないと懸念を表明した。さらに「ダーウィンの言う進化は、ランダムに発生した変異の中から、環境に適さないものが淘汰（とうた）されていく過程だ」と漫画の誤りを改めて指摘。政治的主張は科学的知識を誤用して行うのではなく「個人や団体の信念として表明するべきだ」とくぎを刺した。

ダーウィン（1859）『種の起原』を再読した。{注：進化論に関する詳細な議論は別稿『第四紀植物』で論考する。} 動植物の進化について、自然選択 natural selection が種分化を進めるのだが、自然の中での研究事例がまだ多く収集されてはいないので、とりあえず飼育栽培下の研究事例を参照することは有効であるとしている。栽培植物の進化過程には自然選択も働くが、強い恣意的な人為選択 artificial selection の影響が強く加わる。人間でも自然選択から逃れられないが、しかし、他生物とは著しく異なり、人為選択を強く働かせ、さらに文化的進化 cultural evolution として私意的な社会選別により自己家畜化 self-domestication さえも志向している。たとえば、歴史的に見られる奴隷制度や、現代的には思考停止もその現象の一端である。

人類学者アイズリー, L.（1978）は『星投げびと』で、初期人類への先祖帰りについて、若い研究者だったころに出合った田舎娘の面影に郷愁を記している。

今日のことだが、私はあの体験のことを思って、古いノートを必死で探してみた。しかし、見つからない。年月というものは、印刷の保護にあずからないものをかたづけてしまう。より古い出来事の記憶は残っている。私がかつて知っていた生身の人間のことだったからだ。人生の秋を迎えた現在、彼女の顔と彼女の隣人として過ごした奇妙な季節は、おぼろげな教訓のようによみがえるの

だが、そのころは私も若すぎて何もわかってはいなかった。突然の洪水が起こればロッキー山脈の巨大な岩をも海に向かって運ぶ涸れ谷をかかえた、普段は旱魃に苦しむ西部の広い土地のどこかで起こったことだ。強い風をのがれて丘の陰に隠れるように建てられた、芝土を積み上げてできた家が一軒あるだけだった。わき水でできた小さな池が牧草地のなかにあった。私がおぼえているのはそれだけだ。

彼女は最後のネアンデルタール人なのだ。彼らは、自分ではしらないのだが、獲物を失った狩猟民族であり、戦士を失った女なのだ。彼らの生き方のうえには衰退が重くのしかかる。奇妙な優しさをたたえた彼女は、はるか昔に消えたネアンデルタール人の優しさを思い起こさせる。彼女のからだのなかに復活した繊細な遺伝子は、ふたたびサピエンスと呼ばれる生物の影に埋もれてしまうだろう。あの幻の娘の血族たちは、イタリアの地中海沿岸地方や、方々に触手をのばす氷河以南の地域で、都市を形成することなく生きていた。

ネアンデルタール人は、長年の発掘の結果、独自の夢や優しさをもっていたことが最近わかってきた。彼らは死者に贈り物をそえて埋葬したし、野の花を敷きつめたベッドをしつらえた例さえいくつか見つかっている。彼らの心は、のちに私たち｛注：サピエンス｝に宿る心性にはおかされていなかった、おなじ血をひく恐ろしい生物の心性には。

アイズリーのその想いに甚く共鳴する。素のままに美しく暮らしていたネアンデルタール人の美しい心性が、サピエンスの都市国 polis の権力構築のためにの農耕文化を起こして、文明社会に向かう初期過程、前農耕段階の時代において、ネアンデルタール人はサピエンスに迫害されたようだ（朝日新聞 1991）。しかし、サピエンスに吸収された素朴な美しい心性は時としてサピエンスの心にもよみがえり、先祖返りするようだ。たとえこれがアイズリーの夢想であっても、私も今に受け止めて、その心性をサピエンスの中に探し求めたい。また、考古学者ミズン（1996）は『心の先史時代』で心の構造についてさらに詳細に論考している。

現代の狩猟採集民の統合された心では、認知領域群の領域の間を概念、思考方法、知識が自由に行き来する状態へ変形をとげる。ネアンデルタールは芸術を生まなかったが、サピエンスはその後の芸術や宗教を出現させた。

｛心の構造における｝＜一般的知能＞は、ピアジェの見解に従えば、学習及び意志決定についての汎用の規則によって構成されている。基本的特徴はどの行動領域であり、経験されたことに照らし合わせて行動を修正するために用いられる。学習と問題解決のための包括的な規則群。＜博物的知能＞（直観的生物学）は自然界の理解、動物、植物についての思考。居住地域についての地理学。＜社会的知能＞（直観的心理学）は他の個々人とやりとりする心を読む。個人間の社会関係を調整する。社会的な相互作用、社会的柔軟性の能力。＜技術的知能＞（直観的物理学）は道具を作り、操る。環境から資源を取り出し利用する。＜言語知能＞は感情や情報を伝達する。

十五万年前以降のヨーロッパと近東で見られ、ヨーロッパではわずか三万年前まで生き残るホモ・ネアンデルターレンシス（初期人類）、彼らの脳容量は 1200 ないし 1750cm^{3}へと飛躍的に変化し、社会的言語の発達が｛脳の｝発達を反映している。しかし、認知流動性は抜けていた。ネアンデルタール人の心では、社会的知能は道具の製作（技術的知能）や自然界との相互作用（博物的知能）に関連する知能から切りはなされていた。もの作りの伝統が単調で、骨製や牙製の道具が存在せず、芸術もないのだ。ネアンデルタール人は芸術を生まなかった。

一〇万年前に、ホモ・サピエンス（初期現代人類）が登場する。文化が六万年から三万年前に爆

発的に開花する。人間の心の発達においても進化においても、ひとつづきの比較的独立した認知領域群によって構築されている状態から、そうした領域の間を概念、思考方法、知識が自由に行き来する状態へと変形を遂げる。四万年前から三万年前にかけての時期に、個人的な装飾品が製作され、一万七千年前頃にはラスコー洞窟の壁画が描かれた。宗教的信仰という観念が認知流動性とりわけ博物的知能と社会的知能の統合から生まれる。この両知能が統合されていたことで、先住の初期人類との競争が有利になり、初期人類を絶滅に追いやった。

サピエンスの発達した知能による血塗られた初期文明が心性を浄化するためにシンボルとしての芸術や宗教を萌芽させたのだろうか。ミズンの論考に加えて、現代都市民における心の構造を考察してきた（木俣 2019）。さらに、超克を進めるために、心の構造における一般知能の認知流動性が心の機能を高め、心の統合をもたらす可能性について考察の端緒を得ようと試みた。そこで、心の構造はその機能と一体的に作能することを考えてみたい。

心の構造の諸知能はミズンの見解によれば狩猟採集民において統合されていたが、次第に、集住する都市国が成立し、その権力支配が強まるにしたがって、諸知能の領域は再び分断されるように向かった。具体的には、小集団における自治的な社会的知能は国社会の制度に依存するようになった。その後、諸産業が発達し、18 世紀半ばには産業革命が起こり、以来とりわけ現代では高度な科学技術による生産商品がブラックボックス化し、日常生活における技術的知能さえもほとんど無力無用になり、自然と乖離した都市的生活は五感の鍛錬を阻害し博物知能を縮減し、言語知能は情報処理機器に代替し、これまた直接的な意思疎通を衰微へと導いている。広く普及した公共学校教育制度での画一教科分断は全体的な認知流動する一般知能を発育させない。さらに、現代人の心の構造の主要部は代替言語知能としての情報機器で、これは効率的なアルゴリズムはあるが、非効率的な良心はそこには組み込まれ得ない。

現代の科学技術による便利さのすべてを全否定的にとらえているのではなく、便利の過剰を選択する必要性について述べているのである。個人の自律した選択が生活や人生の質量を知足するように願いたい。心の機能を支える五感（視・聴覚、味・嗅覚、触覚）は美を感じ、第六感（直感・直観）は真を観ぬき、第七感（良心・教養）は善を行う。すべては天性（生物の遺伝子ジーン、gene）のみならず、師友を求め選び、自律した学習（文化の自己複製子ミーム meme）によって、粗野・野蛮から洗練・文明の品性を鍛え磨くのだ。素のままの美しい暮らしは自然と文化の粋であって、自然が粗野、文明が洗練と固定的偏見してはおらず、むしろ現代文明が粗野で野蛮な状態にあるのではないのかを問いただしたい。

分子生物学の草創期に渡辺格の集中講義を聞いた。自然の階層という概念に甚く感銘を受けたので、生意気にも最前列から何らかの質問をした記憶がある。彼からは、世の中を良くしたいのなら、辻説法をせよ、と言われた。彼の影響に加えて、国立遺伝学研究所の阪本蔵書にあった J.B.S.ホールデンの本を読み、草創期の分子生物学と全体論の議論に強い印象を受けて、その興味を今日にまで持ち続けてきた。当時、私は研修生であったが、研究所の抄読会において、全盛であったショウジョウバエの研究成果をゾウに当てはめるような論理はおかしい等という反論を応用遺伝学の側から聞いていた。渡辺格（1969）編『生物学のすすめ』で、彼は自然の階層に関して次のように記している。

そこで、学部生の頃の私は公害への批判から科学論や哲学にも関心をもち、還元論や人

間機械論に対抗する全体論や自然の階層構造に誘引された（山口 1970）。全体論 holism とは、系全体はそれの部分や算術的総和以上のものであると考え、全体を部分や要素に還元する（還元論 reductionism）ことはできないとする立場である（Wikipedia2020.9）。ここに、ゴールドシュタイン（Goldstein, K.1934）『生体の機能』から全体論による機能の統合について、要約引用する。心の構造の統合はその機能が動的平衡を維持することと理解したい。

自然現象の分類の根底とした三つの部門への分類、即ち生命過程を増殖（栄養、成長、生殖）興奮性（刺激に対する反応）および感覚（意識的感覚）に分ける方法が再び新たな意味をもった。生体全体の統一性に関与する程度の大きさによって、個々の器官系を分類せんとする方法も想起するべきだ。統合の強さは存在の高さの標準となる。もっとも統合は自由、全人格的行動、生産性、充実せる行動などの言葉で特徴づけられるが、それらはいずれも同一事実の異なった表現にすぎない。

生物の階層的秩序づけの試みの困難さは、個々の生体の本質の把握が困難であり、さらに、生物の全生物界における位置決定には、この全生物界そのものを知っていなければならないからである。全生物界の認識は個々の生物を総合するだけでは不可能で、できるだけ多くの資料を蓄積して、かの全体的直観が現れ出るのを待つよりほかはない。

生体は比較的に恒常な質的特徴的な存在として定義される。環境刺激によるあらゆる変化は必ず適当な時期に適当な平衡に達するという事実によって、生体はその主要特徴なる比較的恒常性を維持することができる（生物学的基本原則）。あらゆる作能は質と空間的関係の外に、時間的契機からも規定されている。存続の危機的な動揺は生体が世界と生産的な交渉にある時に生じる。それは征服されるべき不平衡状態の表現である。平衡の回復は生体が大いなる世界の内に自らの環境を発見することによって可能となる。人間においてのみ、不完全性即ち苦悩に耐え忍ぶことによって本質と世界との狭小化に対抗するという努力が見られる。この努力は人間存在、自由性における最高の生物学的存在に特徴的な現象である。

ダーウィンもゴールドシュミットも、自然界の中で営まれる研究事例資料をもっと蓄積しながら、論考していこうとの学問的姿勢であったと受け止められる。また、人間の特異性を認識・区別していることを確認しておきたい。ベルタランフィー（1967）『人間とロボット―現代世界での心理学』も理学部生になった頃、身近な大学闘争や公害闘争の最中で、科学とは何かと大いに考えざるを得なかったので、読んだ。こうしてみると、50 年ほど前に読んだ書籍が今改めて論考を進めるにあたって新鮮に背中を押してくれているように思える。深く考え、緻密に書かれた著作は古典になり、これらの古典を読むことはとても大事なことだ。欧米の大学でギリシャ時代からの古典を大事にし、また、副専攻を求めていることに教養への敬意の差異を思う。日本の大学は図書館や博物館を大事にせず、幅広い教養を捨て、今ここの実利に溺れてしまったのだろう。このことはいずれ別稿で三省してみたい。次に関心の深い記述を要約引用する。

現代世界での心理学的技術の発展が大衆社会の中で生み出した影響力の深さは、ますます複雑精妙になる一方の機械装置技術の発明から生ずる影響にいささかも劣らないものがある。物質的技術である自然の支配は、心理学的技術である人間自身の支配で補われたのである。科学と技術は諸刃の剣で、熱核戦争の脅威や人口の爆発やサイバネティック社会での社会問題はもはや常識である。生物学者である私は基本的なものの見方を問題にするのであり、ある時代の社会＝文化状況と科学

と世界観との相互関係や相互作用の研究である。全体を組織だてられた系 system としてまとめて眺めることは容易でない。

生命現象は機械論的アプローチでと対比されるものとしての有機体論(全体論)的アプローチによってとらえられる。物理＝化学的レベルから細胞、生物個体、社会的レベルまで、すべての階層的レベルで生命現象を研究する必要がある。突然変異と選択という機会的なできごとによって生きものの秩序と編成を説明するのには限界があるようにみえる。生物体は、その成分や構成素材をたえず交換している開放系としてとらえられ、このような系をあつかえるように物理化学を拡張すべきである。全体性の概念とそこから生ずるいろいろの結論とを認識論的に明らかにして、科学の認識論全体に役立てる。システムには物理学的、生物学的、技術的、社会学的等々のいろいろな形で現れているものがあるけれども、実際にどんな形をとっているかにかかわらず共通の性質を示す抽象的なものとしてのシステムを対象とする多くの分野にまたがる学際科学として、一般システム理論というものが想定される。

人間は言語、思想、社会的存在、金銭、科学、宗教、芸術などのシンボルの世界に住んでいる。彼をとりまく対象物の世界は、こまごました周囲のものをはじめ書物、車、都市、爆弾にいたるまで、シンボル的活動の物質化したものなのだ。緊張の作りだしや遊戯や探検行動では、たんに恒常性維持的（ホメオスタシス）なものではなくて、生物体の自律活動の表現である。全体として（例外はある）生物学的に不利な行動は選択によってすみやかに消滅していく。これと対照的にシンボル的行動はその根元において創造的（高次の自律性）であるばかりでなく、生物学的な有利性をはるかにこえたものでもある。文化のシンボル的世界は基本的に非自然であり、生物学的な自然、衝動、有用さ、適応をはるかにこえたものであり、しばしばそれを否定する。

創発 emergence は、世界のどのレベルもそれぞれ特有の性質と法則性をもっていて、それらはおのおの下位のレベルの特性と法則から単純にみちびきだしたり、それらに還元したりできないとの考えかたである。機械論的な生物学は生物体の機能を人工の機械をもちいて説明しようとし、バイオニクス（生物工学）は自然の発明をまねようと試みている。あの広大にして魅惑的な神秘は、生物学的には劣っていてふがいない生物が、シンボル的活動という独自の方法で自然と進化を越え、それにうちかっているということだ。シンボリズムはホモ・サピエンスの種差である。認識的シンボルが進化してくるためには、洞察、それまで無関係であったものごとをいっしょに見るということだ。決定的な段階は人間がどのようにしてか、ものごとの代表とするのに適当なイメージ心象を作りあげたことだった。価値の自然主義的な理論は科学にもとづいている。究極の価値は個人の維持、社会あるいは種の存続、最大多数の最大幸福であるようにみえるが、このことが生物学的な一般原則であるからこそ、これは真、善、美という伝統的な三位一体で表現され人類の文化、科学、芸術、宗教につながる人間に特有の諸価値にかんしては、無縁のものなのだ。

人間は、文化および文明という名の自分自身の環境を創りだす動物であるが、この環境は個人と社会のどちらの点から見ても、生物学的有用性をはるかに超越したものである。文化と文明は、ただ生物学的あるいは生存のためというだけの価値とはうまく一致するものではない。{注：非常に率直な見解が記されているが、世情では誤解されるだろうから略そうと考えたが、そのまま引用する。} 黄金律やそれと同様の訓えは適度に社会的な種の本能に根ざしているので、さまざまな国民や文化のあいだで共通の道徳の基盤になっている。しかし同じ理由から、いっそう進んだ人類社会ではこの自然主義的命題は問題をはらんでいる。これは極めて崇高な道徳的教えで、人口がまばらでよく開けた国土では適切であったであろうが、近代的衛生学や医学、寿命の延長等々が人類の悲惨さの倍増に繋がっている今、知恵おくれの人、精薄児、犯罪者にまで手あつくすることが、どれだけ有用で、道徳的とさえいえるのだろうか。その結果、人類という種の遺伝子プールが劣化して、

バカと悪人の世代を養いはぐくむことになることは、科学的事実である。自然主義的価値はホモ・サピエンス特有の人間的価値ではなく、社会的動物の本能をことばになおしたにすぎない。ある生物がその行動の格律が普遍的法則となりうるように行動することこそ本能の定義であり、自然選択は通常、本能が種を保存するようにしてくれている。

シンボリズムこそが人間を最高の動物よりもさらに高めた。知的な何かのために犠牲を払うことは本能のレベルの上にきずかれたシンボル的上部構造である。私たちは価値の体系をも一つのシンボル的世界として理解し、基本的基準はどの場合にも共通であり、価値もまた自由に創造されるものである。人間の条件は自由な決定にゆだねられており、自分自身で築いたシンボル的構造のうちどれを選ぶかは自由であり、これこそ人間の尊厳なのである。ニーチェが私たちの時代のうちに見いだしたニヒリズムは、伝統的な価値が崩壊してしまったためというより、複雑な文明に必要な価値体系がまだ進化してきていないことからくるのだろう。非人格的で、非人間的でもある社会的な諸力が個人のもっとも私的な生活までもまきこみ、統制し、支配した時代はこれまでなかった。個々人の道徳心の高さ、人間的な誠実さではどうにもならない。問題は道徳律を押し広げて個人以上の社会的実体までも含ませるようにすることであり、個人が社会的巨怪にむさぼり食われないような防壁をもうけることである。

いま現れはじめているもう一つの文明が厳然とした実在であることを、念頭におかねばならない。それは大衆文明、技術的で国際的で全地球全人類をおおう文明、そこでは古い文化的価値と創造性が、新しい機構によりとってかわられていく文明である。イデオロギーの差や人種の差は長い目で見て、産業化された大衆社会の物質文化の同一性を前に、無意味になるだろう。その時の個人の課題は、大衆社会が許すかぎりで古い文化の遺物を保存することにある。

まず最初に斬新なものはナンセンスとしてしりぞけられる。第二段階では自明のこと、つまらぬことだと宣言される。やがて第三期には、以前の反対者が自分こそ発見者であると名のるのだ。商業主義社会が供給するあらゆる小道具でもって、人間のなかにある人間的なものを抑圧した。このような自家撞着は必然的に絶望、知的不幸、非行に行きつくほかはなかった。彼らは科学研究から予期できる利益を触れまわるよりは、むしろそこから美的満足をひきだし、実在の一元性の会得に比すべき洞察をひきだしたのだ。私はいろいろの時期に実験にもたずさわり、数理生物学や科学哲学もやった、詩なども書いたが、これらの活動のあいだに矛盾や対立を感じはしなかった。一般システム理論のような統一概念は、科学と、人文活動という見出しのもとに伝統的に包括されている諸分野とのあいだに橋をかけると思う。

ベルタランフィーの見解によれば、生物学的に不利な行動は自然選択によりすみやかに消滅する。しかし、人間の文化的進化としてのシンボル的行動はまさに非自然であり、生物学的な有利性をさえ否定することができる。すなわち、人間は生物学的には劣った存在であるが、シンボル的活動によって自然的進化の枠から外れることができる。生物学的一般原則は人間の諸価値とは無縁なものになってしまっているのである。自然選択は本能が種を保存するように働くが、人間の場合は社会的動物の自然主義的価値を越えて、社会的弱者はもとより、犯罪者をも手厚く処遇するように人権概念が指向している。日本では弁護士がえてして悪意・毒をもった殺人者さえも精神錯乱者として免罪をするように仕向けているようにさえ見える。犯罪の被害者がさらに二次的に社会的被害を受けるような構図は納得できない。私とて国権力による死刑制度に賛同はしないが、明確な悪意をもってなされた犯罪を法律の名のもとに恣意的に許すのなら、法治社会とはならず、日本のサスペンスの定石のように、私的復讐を助長することになる。被害者を犯罪者にさせてしまい、

悲しい正義の犯罪を誘発することになる。

今日、私生活の場面にも、防犯カメラ、車載カメラ、GPS やビッグ・データ利用などあまりに監視が行き届き、個人の誠意や人間の信頼は虚無化されてしまう。過剰な商業主義はすべての物心を商品として金額評価に替えてしまい、金銭では測れない、目では見えないような真善美の価値を失わせてきた。全人的な心の構造と機能の発達を求めて、生き物としての人間が暮らしのために必要な生業、家事、遊び趣味、任意な奉仕や環境保全活動などにも人生の時間の一部を用いたらよいのだ。

野生動植物に働く自然選択だけではなく、自己家畜化した人間の場合は強力な人為選択、極論すれば人為選別が行われてきた。人種や民族差別のみではなく、階級、階層、さらには微に入り細に入るような個人能力への選別が社会ダーウィニズム、優生学などによって行われた。ハックスリー（1932）『すばらしい新世界』がまるで予言したようだ。ドーキンス（1989）『利己的な遺伝子』に記述されたジーンとミーム、およびハラリ（2011）『サピエンス全史』と（2015）『ホモ・デウス』については別に論じたので、次のサイトを参照されたい（木俣 2019、『環境学習原論』　www.ppmusee.org/_userdata/pel2019.pdf）。

5.　死に至る病・絶望の快復と希望

天使の教え（ヨハネの黙示録）に添って、撥撫（いじめ）という悍ましい毒に対する方策が 3 つある。まず、悍ましい毒に報復の毒を以って制する方法であるが、これでは自らをも別の毒に汚染させてしまうだろう。次に、悍ましい毒から逃散する方法であるが、とりあえず毒から身を守ることはできるが、悍ましい毒がなくなるわけではない。第 3 に、悍ましい毒に事実によって向きあい、超克する方法である。これは重大な苦しみを伴うが、個人の毒を解くことになるだろう。これらはおおかた倉田の記した処方箋に近い。

毒人間は良心を持たないので、良心を持って抵抗してもまったくの無駄である。『あたしたち、海へ』の結末のように、ペルー（自殺する事と解釈される）ではなく、もう一つのペルー（別の場所で生きるという意味）に行ってしまうことである。毒人間の毒が及ばない場所に逃散することである。良心ある人が負けて悔しいなどというのはそれこそ毒素に侵されているのであって、抵抗や復讐など無意味なことから自らを解放してもっぱら幸せを求めるのだ。

それでも勇気をもって、根本的に毒素から自ら恢復するには、苦しい事実に向きあい、心的外傷後ストレス障害を超克するしかない。被害者は良心を持って自らを責めるのではなく、良心を待たない人がいる事を認知して、それを回避しながら目的を達成する方策を見つけることだろう。とはいえ、個人としては良心を弱めたらどんなに生きる事が容易になるだろうか。でも、社会は壮絶な騙し合い、奪い合いの争いの場になってしまうのだろうか。人は大方のだれもが幸せになってよいのだ。科学的に唯物論の立場に居れば、祖霊や心霊などはいない。しかし心の機能は、父母、祖父母から祖霊にまで想いは及び、たとえばお星さまとして象徴してでも、現世の私たちの心を励まし、護っているのだと感じさせるのだろう。陶淵明の「帰去来の辞」はそれなりの長文である。結びの文節で、彼は次のように言っている（松枝茂夫・和田武司訳注 1991）。

晴れた日が来れば、ひとりで歩き回り、杖を傍らに突き立てて農作業の真似ごとをする。また、

東の丘に登ってのんびりと口笛を吹き、清流を前にして詩をつくる。自然の変化にわが身をあわせ、生命の終わるのを待ちうける。天命を素直に受け入れて楽しむ境地に入れば、もはや何の迷いもなくなってしまうものだ。

この境地は私の老師降矢静夫のライフスタイルとほとんど合致するものだ。私もこのような境地を願っているが、残学の故に今しばらくはそこに至らないだろう。有機無農薬でささやかに家族の野菜を育てているだけだが、害虫を防ぐためには日々殺生をせねばならない。可哀そうとは思うが、食べ尽くされてしまう。昨年はイノシシに、山畑で栽培していた作物のすべてを舐めるように食べられてしまった。まねごと山村農だから、飢えもせずに都市で暮らしているが、山村で農業者として生計を立てている高齢の人びとにとっては、まさに死活の事態である。

私は陶淵明と同じく「八政始食」、農業を国の経世済民の基盤に置くべきだと考えて、政策提案をしてきたし、都市民も含めて消費者などと自らを位置付けずに、自らも庭や市民農園などで任意に楽しく農耕をして、家族の野菜くらいは生産したいものだ。他国に依存した大量生産物の輸入だけでは、量的かつ質的な食料の安全保障はできない。国の経世済民政策が世間に及ばなければ、家族や地域共同体を護るために、地域自治共同体は家庭菜園、市民農園や家族農業を政策として促進、振興するべきだ。

第 3 の超克という方法をとるにあたって、現代人の心の構造と機能について考察を深める必要があることに気づき、本論考を書き進めてきた。まとめとして要点を繰り返すが、現代人の多くが自然から乖離する都市的環境に居住することで生物的には退行進化に向かった。このために心の構造を構成する諸知能が衰微し、この劣化を発達した科学技術による外部機械装置で代替するように文化的進化を進めた。これにより五感は充分に発育せず、第 6 感（直観）はマスメディアの無限流布する不確実情報に強く影響され依存し、人間の心の構造も機能も統合的に働かず不調に陥った。第 7 感（良心）も鍛錬されず、文化的進化の自己複製子ミームの活力をを鈍らせて、個々人の美や真を求める心の機能も衰弱し、万物を想い遣る善なる機能も失われようとしている。

この過程はサピエンスがネアンデルターレンシスを、日本でいうなら弥生人が縄文人を絶滅ないし衰亡に追い込んだと同じようで、さらに穿ってみれば、サピエンスがデウスに自ら進んで心を売り渡して、隷属する過程にあるようにさえ思える。このような絶望的工程表を進めさせずに、別途の自律する文化的進化の方途を人間の希望として自然に寄り添う暮らしを探検して、学び直してほしい。この際に、自然に添う温故知新、深い知恵を記した古典や伝統的知識体系を参照することが必要である。

私は科学者として、科学的知識体系にほんの微力でも寄与したと自負するが、それでも人間が生き物であるからには、全体自然から離れて、科学技術に依存した人工環境だけに集住することはできない。近未来の科学技術が万能で、人間は神々と同等になれるなどと増上慢してはいけない。広大な自然は人間がすべてを支配する場所ではなく、さらにその小さな一部にすぎない地球で、それでもすべての生きとし生けるものにとって崇高な地球において他の生き物とも共存して素のままに美しく、幸せに暮らすほかはない。地上において、素原の超個人主義がトランスパーソナル・エコロジーの基礎として、第四紀人新世 Anthropocene が健全な真文明へと展開し、サピエンスが生存し続けられる保障、希望を見つけたい。これはカミガミや諸神への願いを超えて、アニマの祈りだ。

（2020. 9. 23）

用語集　　歴史学会編 2005、郷土史大辞典、朝倉書店、東京。

自然村：自然発生的に成立した村で、行政村に対していう。村は、日本はもとより世界的にも自然発生的に成立したものが多い。そして同一の氏神をもち、血縁的にも地縁的にも深い結び付きをもつ社会集団を形成している。冠婚葬祭をはじめとする日常生活の講、組（相互協力)、生産生活の結(ゆい)（相互労力提供）をはじめとして基本的な村落生活は、伝統的な相互扶助的結合によって運営されている。{日本大百科事典}

村社会：① 集落に基づいて形成される地域社会。特に、有力者を中心に厳しい秩序を保ち、しきたりを守りながら、よそ者を受け入れようとしない排他的な社会をいう。しきたりに背くと村八分などの制裁がある。② 同類が集まって序列をつくり、頂点に立つ者の指示や判断に従って行動したり、利益の分配を図ったりするような閉鎖的な組織・社会を①にたとえた語。談合組織・学界・政界・企業などに用いる。{https://dictionary.goo.ne.jp/word/村社会/}

村：人間がムレ合って生活する小地域、概念としての村落は居住領域＋生産領域＋その他が有機的に統一された小地域的社会結合体をさし、村も概念的には村落と同意であるが、村は古代から存在し続けている実態的な歴史用語である。

家：家父長制的な強い家長権に基づいて構成される、日本的な家族形態の一つ、近親者を中核にして構成される家族に対して、経済的・社会的・観念的な枠組みとして、歴史的に規定された単位。

五人組：江戸時代の末端支配組織、年貢や治安維持などに関して相互検察、連帯責任を負った。

隣組：近世の五人組を原型として、約 10 軒を単位にした隣保団体、1937 年に始まる国民精神総動員運動の末端組織。1947 年にポツダム政令によって廃止された。

連座：犯罪者の身内以外の近隣者や同じ役所の者が、連帯責任を負わされて処罰されること、見せしめと相互監視による犯罪の未然防止の効果を持つ。

喧嘩両成敗：喧嘩で暴力を行使した者に対して、その非理曲直を糺さず、当事者双方に同党の刑罰を科すこと。中世以降に両成敗法は天下の大法として定着し、慣習法的に続き、近代以降の判決にも影響を与えている。

用語集 2　　生物学辞典第 4 版（2001 岩波書店)、Wikipedia 参照確認

環元論（還元主義）reductionism：生物学において、あるレベルの体系はその成分部分に分析され、より高いレベルの行動がその部分の性質や行動、配置によって説明される。下位分類として、①存在論的還元主義；生命体はそれを構成する分子とその相互作用によってのみそんざいする生物学的特性は物理的特性に付随している。②方法論的還元主義；生物学的システムは最下層を調査すること、生物は分子生物学と生化学によってもっともよく説明できる。③認識論的還元主義；ある高い領域に関する科学的知識はそれより下の根源的なレベルの科学的知識に還元できる。

機械論 mechanism：生命論や生物学方法論において、無機的自然について知られている因子およびその組み合わせを重く見る。生物体に起こる現象は生物体を構成する物質的要素それぞれの単独の性質の加算として理解できるとする方法論的立場。自然現象に代表される現象一般を、心、精神、意志や霊魂などの概念を用いずに、科学的方法論で分析する。唯物論は機械論の先鋭化した概念で、霊魂などはないとの断定している。

有機体論（生体論）organicism：生命現象の基本は部分過程が編制されてその系に固有の平衡または発展的変化を可能にしている点にあるとする生命論的または生物学方法論的立場。

唯物論 materialism：観念や精神、心などの根底には物質があると考え、これを重視する。

唯心論 spiritualism：精神のほうが根源的で、物質は精神の働きから派生したとみる。

ネオテニーneoteny：成熟していながら、幼態のままの性質を残している現象。

動的平衡 dynamic equilibrium：物理学・化学などにおいて、互いに逆向きの過程が同じ速度で進行することにより、系全体としては時間変化せず平衡に達している状態。類推としては定常状態、生物の生死や物質の出入りは系外との流れとして直接観察できる。
サイバネティックス Cybernétique：統御し、情報を伝える能力。生物のサイバネティックスには種属を末永く保存する遺伝的情報と、人類の場合には文明という獲得された情報がある。
黄金律 golden rule：キリスト教倫理の原理、マタイ福音書 7 章 12 節「人からして欲しいと思うことのすべてを人々にせよ」(広辞苑)。

関連資料

山口晶（木俣美樹男）1970、人間の未来―次の世代の環境について― I.（生物学について 50 年前に考えたことの再検討 2020）www.milletimplic.net/essey/futurehuman.pdf
黍稷農季人（木俣美樹男）2014、帰去来の辞― いわゆる教育を去る、
www.milletimplic.net/essey/comhom.pdf
黍稷農季人（木俣美樹男）2016、幸せは自由である ―このくにの人々が不幸からぬける手法、www.milletimplic.net/essey/happyfree.pdf
黍稷農季人（木俣美樹男）2017、保守と保身のなかみ、
www.milletimplic.net/essey/hoshuhoshin2017.pdf
木俣美樹男監修 2017、こどもかんきょう絵じてん、三省堂、東京。
木俣美樹男 2019、先真文明への覚書 5.文明の野蛮へ退行、民族植物学ノオト 12：17-36.
木俣美樹男 2019、環境学習原論―人世の核心、www.ppmusee.org/_userdata/pel2019.pdf
黍稷農季人（木俣美樹男）2020、超克への祈りと願い、
www.milletimplic.net/essey/conquest.pdf
黍稷農季人（木俣美樹男）2020、超克 2 嫉妬と保身の自律制御および農耕の勧め、
http://www.milletimplic.net/essey/conquest2.pdf
木俣美樹男 2020、家族の物語：アシュラと禰豆子を事例に、環境と文明 28（7）：5-6.

引用文献

朝日新聞社 1991、朝日＝タイムズ―世界考古学地図―人類の起原から産業革命まで、東京。
アレクシエーヴィッチ（S.Aleksievich）1985（三浦みどり訳）、ボタン穴から見た戦争―白ロシアの子供たちの証言、群像社、横浜。Poslednie Svideteli.
ベルタランフィー（L.von Bertalanffy）1967、長野敬訳 1971、人間とロボット―現代世界での心理学、みすず書房、東京。Robots, Men and Minds; Psychology in the Modern World.
ダーウィン（C.Darwin）1859、　八杉竜一訳 1971、種の起原 I～Ⅲ、岩波書店、東京。On the Origin of Species by Means of Natural Selection.
ドーキンス Dawkins, R. 1989、日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳 1991、利己的な遺伝子、紀伊国屋書店、東京。The Selfish Gene,　Oxford University Press.
アイズリー(L.Eiseley)1978、千葉茂樹訳 2001、星投げびと、工作舎、東京。The Star Thrower.
フォックス（W.Fox）1990、星川淳訳 1994、トランスパーソナル・エコロジー　―環境主義を超えて、平凡社、東京。Toward a Transpersonal Ecology: Developing New Foundations for Environmentalism.
ゴールドシュタイン（K.Goldstein）1934、村上仁・黒丸正四郎訳 1957、生態の機能―心理学と生理学の間、みすず書房、東京。Aufbau des Organismus: Einführung in die Biologic

unter besonderer Berücksichtigung der Erfahrungen am kranken Menrtinus Nijhoff. Haag, 1934.
ハラリ Harari, Yuvak Noah 2011、柴田裕之訳 2016、サピエンス全史―文明の構造と人類の幸福、河出書房新社、東京。 Sapiens: A Brief History of Humankind
ハラリ Harari, Yuvak Noah 2015、柴田裕之訳 2018、ホモ・デウス―テクノロジーとサイエンスの未来、河出書房新社、東京。 Homo deus: A Brief History of Tomorrow
長谷川明 1987、インド神話入門、新潮社、東京。
ヘッセ (H.Hesse)1922、高橋健二訳 1959、内面への道シッダールタ、新潮社、東京。
ハックスリー (A.Huxley) 1932、黒原敏行訳 2013、すばらしい新世界、光文社、東京。Brave New World.
井上荒野 2019、あたしたち、海へ、新潮社、東京。
キルケゴール 1848、斎藤信治訳 1939、死に至る病、岩波書店。
倉田百三 1952、超克、角川書店。
ミズン(S.Mithen)1996、松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。The Prehistory of The Mind.
内藤朝雄 2009、いじめの構造―なぜ人が怪物になるのか、講談社、東京。
日本聖書協会 1995、ヨハネの黙示録、新共同訳　聖書、東京。
ペロ (A.G.Perrot)、奥田潤・奥田陸子訳 1970、生物のサイバネティックス、白水社、東京。Cybernétique et Biologie.
歴史学会編 2005、郷土史大辞典、朝倉書店、東京。
スタマテアス,Ｂ.(B.Stamateas) 2008、久世修平訳 2015、心に毒を持つ人たち　―あなたを傷つける「困った人」から身を守る方法、ＳＢクリエイティブ、東京。
スタウト (M.Stout) 2005、木村博江訳 2012、良心をもたない人たち、草思社、東京。
徳田御稔 1957、改稿進化論、岩波書店、東京。
陶淵明 403、勧農、陶淵明全集(上)、松枝茂夫・和田武司訳注 (1991)、岩波書店、東京。
ワイルド (O.Wilde) 1888、西村考次訳 2003、幸福な王子 (改版)、新潮社、東京。
山折哲雄監修 1991、世界宗教大辞典、平凡社、東京。
養老孟司 2003、バカの壁、新潮社、東京。